大谷大学真宗総合研究所

研究所報

No.59　　2011. 10. 1.

目次

親鸞像の再構築―『『教行信証』の思想』（親鸞聖人七百五十回御遠忌記念論集）の発刊によせて―　1
2011(平成23)年度「特定研究」(追加)研究組織一覧　2
2010(平成22)年度「指定研究」研究経過報告　2
2011(平成23)年度「一般研究」(追加)研究組織一覧　10
2010(平成22)年度「一般研究」研究結果概要　10
海外学会参加報告　34
海外研究調査報告　39
国内学会参加報告　41
公開講演会報告　44
彙報　46

親鸞像の再構築

―『『教行信証』の思想』（親鸞聖人七百五十回御遠忌記念論集）の発刊によせて―

親鸞関係文献目録資料室長　教授　山野俊郎

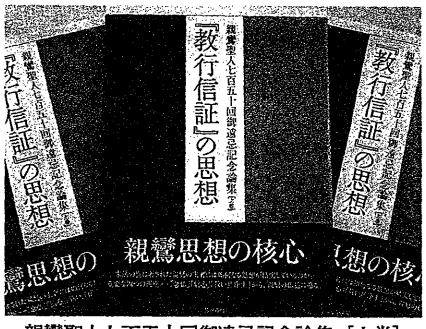
親鸞聖人750回御遠忌にむけて、「親鸞像の再構築」を研究テーマとする御遠忌記念特別指定研究班が発足したのは、2005年であった。このたび、研究班の６年間にわたる研究活動の成果として、「『教行信証』の思想」（親鸞聖人七百五十回御遠忌記念論集［上巻］）（筑摩書房）が発刊された（８月25日）。

なお、記念論集の下巻のタイトルは『親鸞像の再構築』（10月７日刊）である。本書は、1961年の700回御遠忌以降の半世紀にわたる親鸞研究の進展をふまえて、750回御遠忌という節目の年に、あらたに「親鸞像の再構築」を提示し、親鸞思想の現代的意義を世に問うものである。

「御遠忌」は宗祖親鸞聖人が入滅して、とくに300回忌（1561年［永禄４］）以降、50年、100年を単位に営まれた大規模な記念法要である。御遠忌を特別な機縁として、その折々の社会的、政治的、あるいは学問的な状況を背景に、宗祖の教えが再確認され、さまざまな親鸞像が提示され、人びとに受容されてきた。

たとえば、1911年（明治44）の650回御遠忌の前年には、佐々木月樵著『親鸞聖人伝』などが発刊された。その50年後、1961年（昭和36）の700回御遠忌には、大谷大学編『親鸞聖人』が刊行され、赤松俊秀著『親鸞』が発刊されて、あらたな親鸞像が公表された。そして、750回御遠忌を迎えたこの節目の年には、過去50年間の親鸞思想や親鸞像の進展をふまえて、あらたな「親鸞像の再構築」が要請されるのである。

2005年にスタートした御遠忌記念特別指定研究班の研究活動は、①史的な親鸞像の再検討、②思想教学の検証、③現代における親鸞思想との出会い、④文献目録、の４つの部門にわかれ、とくに①～③の歴史、思想、現代の研究課題については、内外の先生がたによる公開研究会をかさね、課題の理解に務めてきた。そのような地道な活動の積みかさねが、今回の「御遠忌記念論集」として結実したのである。



親鸞聖人七百五十回御遠忌記念論集［上巻］

上下２巻に分冊された「記念論集」の上巻のテーマは「『教行信証』の思想」であり、『教行信証』にもとづく親鸞像の「再構築」を試みる。巻頭論文「『歎異抄』から『教行信証』へ」（延塚知道氏）によれば、1961年の700回御遠忌の頃から、亀井勝一郎や丹羽文雄、野間宏、高史明などの知識人たちが親鸞思想に注目し、かれらによって一般的親鸞像が形成されてきた。しかし、それは『歎異抄』に依る親鸞像であり、その親鸞像が現在まで継承されているという。依るべきは『教行信証』の思想にもとづく親鸞像であり、その究明はいまだ不十分であるとされる。

一方、下巻のテーマは「親鸞像の再構築」であり、史的な親鸞像（歴史編）や親鸞思想の現代的意義（現代編）を解明する論考が収録される。このうち歴史編では、実証史学にもとづく史実上の親鸞像を究明すると共に、伝承上の親鸞像の解明をも課題としており、語り継がれてきた親鸞像を「再構築」する。

過去50年間の親鸞思想研究の課題をふまえて、「親鸞像の再構築」を試みた本書が、2061年の800回御遠忌まで、今後50年後にむけて、親鸞研究の導きの書となることを期待している。

2011(平成23)年度「特定研究」(追加)研究組織一覧

■「特定研究」研究員の追加（2011年４月１日付）

研究名	研究員名
「建学の精神」教育推進研究	研究員　福島栄寿（准教授・日本史学）

■「特定研究」研究補助員の追加（2011年４月１日付）

研究名	研究補助員名
「建学の精神」教育推進研究	研究補助員　拝原祥子（博士後期課程第２学年）

2010(平成22)年度「指定研究」研究経過報告

大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念
特別指定研究

親鸞像の再構築

研究代表者・教授　延塚 知道
（真宗学）

【研究班の目的】

本研究班は、2011年の親鸞聖人750回御遠忌に向けて発足した特別指定研究班である。「親鸞像の再構築」というテーマを掲げているように、前回御遠忌以降の50年間における親鸞研究の動向を踏まえて、これからの親鸞研究に新たな展望を開くことを目的としている。

【2010年度活動報告】

１、御遠忌記念論集『親鸞像の再構築』の企画・編集

本研究班では「親鸞像の再構築」という研究テーマの下、公開研究会を重ね、現在の親鸞研究における課題をこれまでに議論してきた。そして、思想、歴史、現代という３つの分野を掲げて、それぞれの分野における親鸞研究の方向性を以下のように確認してきた。

①『教行信証』の思想に基づく親鸞像を再構築する。

②実証史学に基づく史実上の親鸞を究明するとともに、伝承上の親鸞像を再構築する。

③親鸞の他力思想を導きとして、現代における諸問題の解決の端緒を見出す。

昨年度はこの３つのコンセプトに沿った論集を企画し、各執筆予定者より題目と論文のキーワードを提出いただいて、論集の目次を作成し、構成を具体化したことである。

本年度は、各執筆者より論文を提出していただき、内容の整理に着手した。そして、出版社と交渉を重ねる中で、論集のタイトルの検討、目次の整理（編目項目名の変更、各論文タイトルの変更）、各部門の内容の要約などを行った。その結果、論集の形態は上下二巻とし、上巻は「『教行信証』の思想」と題して、その中、「『教行信証』への視座」と「『教行信証』読解を巡る問題」という二つの部門を設け、主として思想面からの研究成果を公表することとした。下巻は「親鸞像の再構築」と題して、その中の前半には「歴史の中の親鸞」とし、歴史学の分野からの研究成果を掲載する。また後半は「現代に生きる親鸞」とし、親鸞思想を基盤にして近現代という時代とその時代の問題・課題に光を当てる論稿を収めることとした。下記に各部門のコンセプトを掲げることによって、論集の全体像を提示することとしたい。

上巻　『教行信証』の思想

・『教行信証』への視座

明治以降、『歎異抄』が広く開放されたことにより一般的親鸞像が形成されてきた。しかし『歎異抄』は親鸞の著作ではなく弟子の聞書である。親鸞思想をより

深く、また確かに究明していくためには、親鸞の主著である『教行信証』の思想に依らなければならない。本篇においては、「念仏」「信心」「救い」「浄土」という親鸞思想における重要な四項目を掲げ、『教行信証』に基づいた親鸞の他力思想を明らかにすることをねらいとする。

・『教行信証』読解を巡る問題

『教行信証』を読解していくに当たって浮き彫りになる諸問題を扱う。例えば『教行信証』の構造論や、テキストの読解方法については諸見解があるが、これらの問題を再検討する視座を提示したい。また『教行信証』の成立に関わる問題として、親鸞がどのような時代・社会と向き合う中で執筆したのかを検討する。そのことによって当時の社会構造や価値観や末法思想という時代認識について考察する視座を提供したい。

下巻　親鸞像の再構築

・歴史の中の親鸞

大正十年、『恵信尼消息』が発見されて、従来不確かであった史実上の親鸞の姿が明確になった。それ以降、実証史学に基づいて史実上の親鸞を明らかにしていくことが歴史学の課題となり多くの成果を上げてきた。そこでの未だ究明を要する問題を明らかにするとともに、実証史学からは等閑視されてきた伝承上の親鸞像の考察をも課題とすることで、信仰の広がりの中で語り継がれてきた親鸞像を明らかにすることを目的としている。

・現代に生きる親鸞

20世紀中葉においては主体の自立という問題が焦眉の課題であり、700回忌（1961年）の頃の親鸞もそのような文脈で読まれた。しかし、一方では「他者との関係によって基礎づけられる主体」という視点が軽視され、自立が孤立を招来し多くの社会問題を惹起することになった。本篇では、近代における親鸞の思想の受容をたどるとともに、親鸞の「他力」の思想を導きとして現代の問題の解決の端緒を見出し、新たな主体の再構築の可能性を開く。

2、文献目録の作成

前回の御遠忌以降の50年間（1961～2011）にわたる親鸞研究を概観するのに資するデータベース並びに文献目録の作成を目指している。データの入力に当たっては、『親鸞大系』別巻（法藏館）所収の文献目録と『仏教書総目録』No.1～No.28（仏教書総目録刊行会）を活用している。本年度は、特に日本語文献の単行本に対象を絞って、データの入力作業を行った。『親鸞大系』所収の文献目録からは、1961年から1982年までに発刊された単行本を抽出し、これの入力作業を完了した。また1983年から2011年までに発刊（または発刊予定）の単行本は、『仏教書総目録』を用いて入力作業を継続的に遂行中である。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の整理・収集・公開

研究代表者・教授　ロバート F. ローズ
（仏教学）

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。本年度も英米班、ドイツ・フランス班、中国班の三班に分かれて研究活動を進めてきた。各班の研究経過の概要は以下の通りである。

〈英米班〉

Ⅰ．翻訳研究活動

(1) *Cultivating Spirituality: A Modern Shin Buddhist Anthology*出版について

近代教学論文集英訳出版に向けて、入稿後に必要となったグロッサリーを9月から10月にかけて作成し、SUNY出版に送った。その後、出版社側で来年度早期の発行に向けて作業が進行中である。

(2) 佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」翻訳研究について

新たな翻訳研究として、昨年度はじまった佐々木月樵の「大谷大学樹立の精神」英訳は、以下の日程で翻訳研究会を行った。

第1回研究会　2月22日　16：00～18：00

第2回研究会　3月1日　16：00～18：00

本年度は、日程の都合で研究会の回数が十分取れなかった。来年度も継続して翻訳を終わりまで行い、改めて全体を通した編集校正を経て、公開できるところまで進める予定である。

Ⅱ. 国際学会関係

(1)国際真宗学会（IASBS）

2011年度、大谷大学を会場に第15回国際真宗学会学術大会が真宗関係５大学共同開催の形で開かれる。それに向けて、今年度は国際研英米班が窓口となり、関係大学実行委員が合同で準備を進めた。

第１回準備会議　９月14日㈫16：00～18：00

於：響流館４階会議室

参加者：ケネス・タナカ（IASBS会長・武蔵野大学）、浅野玄誠（同朋大学）、那須英勝（龍谷大学）、寺本知正（IASBS日本地区会計）、ロバート・ローズ、加来雄之、井上尚実（大谷大学）

・学術大会の概要

開催期日：2011年８月５日㈮・６日㈯（４日の夕方に記念シンポジウム）

場所：大谷大学　響流館３階メディア・ホール、マルチ・メディア演習室

テーマ：True Disciple of the Buddha　真仏弟子

サブテーマ：The Mission and Challenges in Contemporary Society 現代社会における課題と使命

・論文発表申込みが２月末締め切りで、現在プログラムの作成中。４月には学内実行委員会立ち上げ、窓口を引き継ぐ。

(2)ヨーロッパ日本研究協会（EAJS）

３年に一度のEAJS国際会議が、2011年の８月24日から27日までエストニアのタリン大学で開催される。前回に続いて宗教・思想史部会での発表を計画して申込み、審査を通ってパネル発表が認められた。概要は以下の通り。

Panel Title: Spiritual Healing in Japanese Pure Land Buddhism:Cures for Suffering in Genshin's and Shinran's Thought

Presenters: 1. Robert RHODES, professor (Buddhist Studies)
2. INOUE Takami, associate professor (Shin Buddhist Studies)
3. Michael CONWAY, lecturer (Shin Buddhist Studies)

(3)その他

アメリカ宗教学会（AAR）年次大会については、学内行事と重なって今年度は参加できなかった。国際真宗学会ヨーロッパ支部大会は、主催者の都合でキャンセルになった。アジア学会（AAS）年次大会は、例年３月末から４月初めの時期に開催されるため参加が難しい。来年度は、日程調整を早めにして参加できるように検討したい。

Ⅲ. 公開講演会の開催

以下のような公開講演会を開催した。

(1)2010年６月17日㈭16：20～17：50

於：マルチメディア演習室（響流館３F）

講師：ケネス・タナカ氏
（武蔵野大学教授・国際真宗学会会長）

題目：Internationalization of Shinshu and the Role of IASBS: Towards the 15th Biennial Conference at Otani University in August, 2011
「真宗の国際化と国際真宗学会の役割：2011年８月大谷大学に於ける第15回学術大会に向けて」

(2)2011年２月10日㈭16：20～17：50

於：マルチメディア演習室（響流館３F）

講師：奥村浩基氏
（台湾佛光大学・専任助理教授）

題目：「台湾の仏教と仏教研究」

他に講師依頼を検討していた研究者が海外の大学に移ったりしたために、予定した４回の開催はかなわなかった。

Ⅳ. その他

国際研が収集した図書の整理・公開については、図書館と連携して作業を継続中である。英語班のホーム・ページ作成についても、引き続き準備の段階にあり、来年度に継続して取り組む予定である。

〈ドイツ・フランス班〉

1．2010年５月５、６日に、パリにてフランス国立高等研究院（EPHE）とのシンポジウム「フランスと日本におけるナショナル・アイデンティティと宗教」が開催された。同院と本学は学術協定を結んでおり、2006年には本学において大谷大学真宗総合研究所・EPHE合同シンポジウム「宗教と近代合理的精神―日仏文化の比較をとおして」が開催されており、今回のシンポジウムはその続編ともいえるものである。

以下はシンポジウムのプログラムである。本研究班からの発表はボールドで表している。

５月５日

10：15　開会の挨拶　フィリップ・ポルティエ（EPHE・ソルボンヌ大学教授、GSRL主任研究員）

司会　ジャン＝ノエル・ロベール（EPHE・ソルボンヌ大学教授）
10：30　ロバート・F・ローズ（大谷大学教授）
The Buddhist-State Relationship in Japan: Some Observations on the Thought of Saichō and Kūkai, Two Early Medieval Monks of the Ninth Century（日本における仏教と国家―最澄と空海の思想についての一考察）
11：00　ドゥニ・ペルティエ（EPHE・ソルボンヌ大学教授、GSRL研究員）
Entre Vichy et la Résistance: qu'est-ce que la "France catholique"（1940–1944）？（ヴィシーとレジスタンスとの間―＜フランス・カトリック＞とは何か[1940–1944]）
11：30　井上尚実（大谷大学准教授）
The Transformation of Japanese Buddhism during the 19th century: Focusing on the Impact of the Meiji Restoration and the Persecution of Buddhism（19世紀における仏教の変容―明治維新と廃仏毀釈の影響を中心に）

司会　ヴァンサン・ゴーセール（CNRS教授、GSRL研究員）
14：00　ジャン＝ポール・ヴィレーム（EPHE・ソルボンヌ大学教授、GSRL研究員）
Identité nationale française et protestantisme（フランスのナショナル・アイデンティティとプロテスタンティズム）
14：30　村山保史（大谷大学准教授）
State and Religion in the Thought of D. T. Suzuki（鈴木大拙の思想における国家と宗教）
15：30　ティエリー・ルテール（マイアミ大学［米国オハイオ州］政治学科教授）
Pour une sociologie politique de la laïcité en France（フランスにおける世俗化の政治社会学試論）

5月6日
司会　アラン・ロシェ（EPHE・ソルボンヌ大学教授）
11：00　飯田剛史（大谷大学教授）
The Contemporary Situation of Japanese National Identity: Co-existence vs. Anti-foreign Movements（日本のナショナル・アイデンティティの現状―共存と反外国人運動）
11：30　ジャン・ボベロ（EPHE・ソルボンヌ大学名誉教授、GSRL研究員）
Laïcité et identité nationale sous la Vème République（第五共和国下における世俗化とナショナル・アイデンティティ）
12：00　藤枝 真（大谷大学准教授）
Indoctrinating the Younger Generation: A Strategy of Yasukuni Shrine for the Propagation of Patriotism（若い世代の教化―靖国神社の愛国心普及戦略）

司会　フィリップ・ホフマン（EPHE・ソルボンヌ大学教授、宗教科学部学部長）
14：30　ピエール・ビルンボーム（パリ第一大学・ソルボンヌ大学名誉教授）
Eglise et Etat en France et aux Etats-Unis（フランスとアメリカ合衆国における宗教と国家）
15：00　番場 寛（大谷大学教授）
Essai sur le discourse religieux dans le Japon contemporains: autour des différents noms de Shinran et du Namuamidabutsu（宗教の＜ディスクール＞への試論―親鸞と南無阿弥陀仏の異名をめぐって）
16：00　フィリップ・ポルティエ（EPHE・ソルボンヌ大学教授、GSRL主任研究員）
Le retour de la question de l'identité nationale dans la France contemporaine（現代フランスにおけるナショナル・アイデンティティの問題の再来）
17：00–17：15 閉会の挨拶　ジャン＝ポール・ヴィレーム（EPHE・ソルボンヌ大学教授、GSRL主任研究員）

2．2010年8月15日～21日にトロント大学（カナダ）で開催された第20回国際宗教学・宗教史学会学術大会（XXth World Congress of the International Associasion fo the History of Religions）に藤枝真研究員（本学准教授）が参加した。今回の大会の全体テーマは「Religion : A Human Phenomenon（宗教：人間による現象）」であり、これは「宗教の超越性」を強調するのではなく、宗教を人間の一つの営みとして捉えることを意図したものである。藤枝研究員は、"Keeping Up the Grand Narrative: National Identity and State Shintoism in the Public Sphere"（「大きな物語」を保ち続けること：公共領域におけるナショナル・アイデンティティと国家神道）というテーマで発表した。

3．村山保史研究員（本学准教授）、廣川智貴研究員（本学専任講師）、藤枝真研究員（本学准教授）によっ

て、マールブルク大学神学部Dietrich Korsch教授のLuther: Eine Einführung（Mohr Siebeck）の翻訳が進められている。全体の訳が一度完了し、その検討作業を続けている。

〈中国班〉

①大谷大学図書館所蔵真宗大谷派海外布教資料（通称：田代文庫所蔵）の目録作成

中国華中関連の綴資料（仮番号26～）の目録作成作業を継続中。引き続き、残された資料（中国華南・台湾、朝鮮半島関係）に順次着手する。

②中国社会科学院歴史研究所との共同研究

1．2010年７月５日(月)～11日(日)、斉克琛副研究員、常建国事務主任、李錦繡研究員を招聘し、浅見直一郎研究員、桂華淳祥研究員、松浦典弘研究員とともに本学にて研究活動を行い、公開研究会を開催した。

７月10日(土) 16：10～17：30（於：響流館４階　真宗綜合研究所ミーティングルーム）

○固原出土史訶耽墓誌考証

中国社会科学院歴史研究所　李錦繡研究員

2．2011年２月28日(月)～３月６日(日)、李花子副研究員、賈衣肯副研究員を招聘し、浅見直一郎研究員、桂華淳祥研究員、松浦典弘研究員とともに本学にて研究活動を行い、公開研究会を開催した。

３月２日(水) 16：00～18：00（於：響流館３階　マルチメディア演習室）

○《魏書序紀》在探討蒙古高原古代游牧民族発展史問題中的史料価値

中国社会科学院歴史研究所　賈衣肯副研究員

○図們江水源与中朝辺界

中国社会科学院歴史研究所　李花子副研究員

西蔵文献研究

チベット語文献のデータベース化

研究代表者・教授　兵藤 一夫
（仏教学）

北京版チベット大蔵経をはじめとする本学所蔵チベット語文献は、国内有数のコレクションを誇っており、本学はもとより国内外のチベット研究を大きく支えている。本研究は、チベット研究推進のための基盤整備のため、このコレクションを専門の研究者が十分に活用できるよう整理研究することを目的とする。今年度の研究では、近年収集されたチベット語文献について、その整理を通じて全体像を把握し、それを研究者にとって理解しやすいように提示できるようにする。また、従来より所蔵している文献の中で重要ないし貴重と思われるものについて、そのテキスト入力・校正・公開を行う。

研究計画

1．大谷大学図書館所蔵チベット語文献のデータベース化・電子テキスト化

今年度は、本学所蔵の稀覯本、ツァンナクパ著『量決択註』の電子テキスト化とその公開を行う。

2．大谷大学図書館所蔵チベット語文献の整理

図書館所蔵のチベット語文献の書誌情報を全部見直し、統一的な表記と研究者に必要な情報の追加を行う。それによって、チベット語文献の利用を促進する情報提供を行い、また今後の資料収集のための基礎とする。

3．海外の研究者との交流

ブリティシュ・コロンビア大学（バンクーバー）で８月15日～21日に開催される第12回国際チベット学会に参加し、研究発表を行うとともに、学術上の情報交換を行う。

これまで電子テキスト化を行ってきたミラレーパ伝およびミラレーパの宗教詩『百万歌』の研究のために、ミラレーパの研究者である青海民族大学蔵学院のクンガ氏を招聘し、共同研究を行う。

4．その他

内外のチベット文献学関係の研究者を招き研究会を開催する。

研究成果

西蔵文献研究班は、以上の研究計画に基づき2010年度の研究を行った。それぞれの研究成果は以下の通りである。

1．大谷大学図書館所蔵チベット語文献のデータベース化・電子テキスト化

ツァンナクパの『量決択』の電子テキストを作成した。本書はダルマキールティの主著の一つ『量決択』に対する古い注釈書であり、ゲルク派以前の初期チベット論理学の代表的な著作の一つである。現在のところ大谷大学所蔵の写本が唯一の資料である。原本は、ウメ（草書）体で書かれ、古風な綴りや縮約された表記が用いられ、また注釈の方法や議論内

容がゲルク派以降の整理されたものとは異なるため、容易には読解できない。これについて理解しやすいテキストを提供するために、以下のような手順で作業を進めた。

・Tibetan Language Kitを使って、電子テキストとして入力する。
・ゲシェ・ハランパ位（国家的な博士号）を取得したチベット人に写本による校正を依頼する。
・同様に、古風な綴り、縮約された表現、古典文法に合わない表記などについて、読解の助けとなり、また検索にも資するよう、古典チベット文語の表記を併記してもらう。
・以上の校正内容・注記を写本と照合して再チェックしながら、電子テキストに入力する。
・注釈は構造的に書かれているが、科文は後代のように明確に記述されていないので、内容に従って科文を抽出し入力する。

以上の作業のうち、テキストと校異の入力は、年度内に終えることができる見通しである。科文については、全体の半分を終了できる見通しである。

さらに、注釈対象である原典の『量決択』の対応箇所を探し出し、『量決択』のテキストも織り込んだエディションを作成することを目指したい。

2．大谷大学図書館所蔵チベット語文献の整理

現在の図書館の検索システムでは、チベット語文献の全体像を把握することは難しい。チベット語文献だけを抽出する方法がなく、また、刊行物の書誌情報には、その本に含まれるチベット語文献自身のタイトルや著者名が記載されていないことが多いが、研究者が検索する場合には、刊行物のタイトルなどではなく、著作自身のタイトルなどで検索することになるので、文献を探し出すことができないことになる。

また、チベット語をローマ字で翻字している場合、その翻字の方法が複数あるため、検索者の使う翻字システムと一致しない可能性がある。

昨年度の予備調査では、さらにカードにはあるがデータベースに入力されていないタイトルがあったり、未登録のタイトルもあることが分かった。

以上を踏まえて今年度は、書庫の中で実際にチベット語の著作であるかどうかを一々のタイトルについて実見し、チベット語文献の全てに渡って実際のテキストのタイトルを、現在広く用いられている翻字システムで統一的に追加入力した。以上について一通りの入力は終えることができた。

しかし、現在、図書館のデータベースシステムが新しいシステムに移行する切り替え期にあたり、最終的なチェックや、新システムでのエラーが出るか否かの検証は終了していない。

また、アメリカのTibetan Buddhist Resource Centerから図書館が購入したチベット語文献のPDFコレクション（現在までにインド、ネパール、ブータンなどで刊行されたチベット語文献の大部分をスキャンしてPDF化したもの）を学内でアクセスできるようにする簡便なページを作成した。より詳細なシステムについては、来年度の課題としたい。

3．海外の研究者との交流

8月15日～21日にカナダのバンクーバーで開催された国際チベット学会には、嘱託研究員のツルティム・ケサン名誉教授を派遣し、情報収集すると共に海外の研究者との学術交流を行った。

また12月に青海民族大学蔵学院のクンガ氏を招聘して共同研究を行った。

4．その他

以下の公開研究会を開催した。

・野村正次郎氏　（広島修道大学非常勤講師）
　題目：iPadにおけるチベット語の利用について
　日時：2010年11月30日(火)午後4時20分～
　会場：響流館3F　マルチメディア演習室
・クンガ氏（西蔵文献研究班嘱託研究員・青海民族大学蔵学院教授）
　題目：ミラレーパ研究の価値
　日時：2010年12月14日(火)午後18時～午後19時半
　会場：響流館3F　マルチメディア演習室

また、科学研究費補助金研究成果公開促進費による「北京版西蔵大蔵経データベース」（研究代表者：兵藤一夫）にかかわる北京版大蔵経の写真撮影に際して、原資料や番号などのチェックに協力した。

大谷大学DB研究

大谷大学所蔵貴重資料のデジタル映像化

研究代表者・教授　宮下 晴輝
（仏教学）

＊北京版チベット大蔵経

日本学術振興会平成22年度科学研究費補助金を受け、本学所蔵、北京版チベット大蔵経のデジタルデータ化とその公開に向けて、作業を進めた。現在、テンギュルの中で中観部・唯識部の写真撮影が終了し、公開へ向けての調整が行われている。

＊『北京版チベット大蔵経』マイクロフィルム

大谷大学図書館所蔵『北京版チベット大蔵経』マイクロフィルム（計186本）は一次資料の代替資料として学術的価値が高い。中でもテンギュル（134本）に所蔵される中観部、諸経疏部、唯識部、阿毘達磨部は学内外問わず利用頻度が高い。よって、まずテンギュルの中観部・諸経疏部・唯識部・阿毘達磨部のマイクロフィルムのスキャニングを計画した。作業準備として、マイクロフィルムリーダーをWindows PCと接続し、PDF形式でスキャニング、外部記憶装置に保存する作業手順を計画した。この作業手順を踏むことでWindows PCモニターにスキャンした画像を肉眼確認できることから作業効率の向上ができた。

作業内容はマイクロフィルムの選定、デジタル化記録、マイクロフィルムの保存法である。上に示したように、学術的価値が高い中観部、諸経疏部、唯識部、阿毘達磨部のスキャニングをはじめに行い、現在ではテンギュルに所蔵される大蔵経はすべてPDF形式で記憶された。記憶媒体は外部記憶装置二台によるミラーリング、加えてDB研究班が用いているiMacに保存した。現在では約150本のスキャニングが終了した。

＊真宗関係文化財

1）安田理深の音声テープ

本カセットテープは、安田理深による講義を録音したものである。作業開始段階において、内容把握済みのものが51本、内容不明のものが36本あった。従って、それら計87本のカセットテープのデジタル化、内容把握、リスト作成を行った。まず始めに、音声劣化を防ぐため、デジタルデータとして録音した。即ち、カセットデッキとコンピュータをステレオラインで接続し、全てのカセットテープを等倍速で録音した（44,100Hz, wav 16bit.）。次に、デジタル化した音声を用いて、内容不明テープ36本の内容把握を行った。その結果、内容不明テープ36本は、内容把握済みテープの内の一部のコピーであることが判明した。その結果に基づいて、内容不明であった36本のテープと内容把握済みのテープとの対応リストを作成した。

2）横山写真館の資料

横山写真館から、掛け軸を初めとする諸々の真宗大谷派文化財の写真撮影と、そのリスト作成の依頼を賜った。それら計386点を掛け軸、手紙など、同一グループに分類しつつ、デジタルカメラで写真撮影を行った。現在、写真撮影は全て終了し、それらの目録を作成している。

＊パーリ語貝葉写本

大谷大学は、百年程前にタイ王室から寄贈されたパーリ語貝葉写本のコレクションを所蔵している。そのコレクションに対して、1995年に大谷大学図書館編『大谷大学図書館所蔵貝葉写本目録』が出版された。さらにその後、コレクション中の稀覯文献の一つである*Paññāsajātaka*の研究が始められた。

このような状況を受けて、写本の画像データ化と稀覯文献の抽出を行っている。しかし、大学所蔵のコレクションは大量であるため、データ化する写本に優先順位をつけなければならない。現在の状況として、稀覯文献の約10套70phūkの画像データ化を終了した。また、稀覯文献抽出作業の一環として、タイの寺院に所蔵されている文献の現地調査などを適宜行っている。

＊本学図書館所蔵古典籍データベース

約３万部14万冊を数える本学図書館所蔵の古典籍資料の書誌データベース整備とデジタルアーカイブ化を推進し、研究の情報化に対応した研究基盤の整備を目指している。現状の冊子体目録は、目録間の情報整合、統合検索にも課題がある。2010年度は、図書館の協力を得て、古典籍の書誌データとして採録する情報項目の設定をするとともに、1487件のデータ蓄積を行った。

＊古地図のデジタルデータベース

本学所蔵の古地図を用いて、ある地点情報をもとに年代の異なる同じ地図を重層化し時間軸で変化を追うことは、研究においても、教育コンテンツとしても大きな価値がある。2010年度は、平野寿則准教授の協力を得て、古地図をデジタル化し重層化するプラットホームを構築した。

真宗同朋会運動研究

真宗同朋会運動の歴史と現状を「聞き書き」を通して把握し、その現代的意義を明らかにする

研究代表者・教授　水島 見一
(真宗学)

本研究は、和田稠氏の寄付金による特別研究で、真宗と社会との関わりを主題とし、具体的には真宗同朋会運動における求道と獲信に学ぶものである。したがって、本研究は、一人ひとりにおける「群萌の目覚め」に視点を置き、特に、求道の道程に焦点をあてて、一人ひとりの宗教的人格に触れることを通して、真宗同朋会運動の意義を明らかにすることを目的とする。

また、信仰が生み出す社会性、および人々の精神性に与えた影響なども調査を通して把握し、真宗同朋会運動の現状や社会的・現代的意義を明らかにしていきたい。

以上のことから、本研究は昨年度に引き続き、全体を理論編と調査編の二部構成として組み立てた。具体的な研究は以下のとおりである。

①理論編の成果：

基礎資料の作成：

研究の基礎資料づくりとして、真宗大谷派宗門内で、同朋会運動に尽力され、リードした先達の思想などの整理をしていく。具体的には以下の人物に焦点をあてて、思想やその背景の把握につとめた。

・高光大船
・高光一也
・訓覇信雄
・松原祐善
・藤原鉄乗
・坂木恵定
・米沢英雄
他

②調査編の成果：

公開研究会　：

同朋会運動の社会的意義を明確化していくために、宗門内・外両面からの意見・研究報告を公開研究会という形で、研究展開した。

2010年度4月以降の公開研究会は、本学響流館3階マルチメディア演習室にて、以下の講師をお招きし開催した。

5月20日　上田閑照先生（京都大学名誉教授）
テーマ：清沢満之とは誰か―当時に於てそして現在の私たちにとって―

7月22日　亀井鑛先生
テーマ：真宗同朋会運動について―その歩みと今後の展開―

現在は、これらの公開研究会をうけて、整理・分析を進めている。

2009年度研究会成果　：

昨年度、公開研究会にお招きした先生方の講演録を成文化している。

具体的には下田正弘先生、マイケル・パイ先生、二階堂行邦先生、亀井鑛先生などであり、最終成果の中に盛り込むため、先生方と原稿のやり取りを進めている。

聞き書き調査の実施：

本研究の中心であり、門信徒の方々に「聞き書き」という調査手法を用いた調査を展開した。また昨年度の調査に対する補足調査も同時に行っている。

本調査は、「聞き書き」という手法の特性から、1件あたりの調査時間に膨大な時間を要する。本年も昨年同様に、全国各地で10件の調査を行っている。詳細な調査結果については、ここでは省略させていただく。

その他の活動　：

本年度は、理念編および調査編への研究の展開に加えて、以下のような研究活動も推進した。

・真宗大谷派教学大会への研究発表（7月4日）
・真宗大谷派研修部などとのコラボレートにより、「親鸞キャンプ」を開催し、広く学内の学生にも公開された、ご門徒の方々と学生との交流を実践した。（7月10日～12日）
・東京大学で開かれた「親鸞ルネッサンス」に参加し、広く「親鸞」を研究する方々との交流を図った。
・法藏館と研究成果の出版に向けて会議を進めている。

以上が、2010年度の研究成果の概略である。2011年度も引き続き、理念編・調査編ともに、深めていくことをとおして、真宗同朋会運動の現代的意義を明らかにしていく。そして研究成果の出版に向けて、具体的に展開していく予定である。

2011(平成23)年度「一般研究」(追加)研究組織一覧

【個人研究】

研究名等	研究課題及び研究組織
【2011～2012年度科研採択】 一般研究（許班）	研究課題　国会図書館所蔵「朝鮮筆記」の研究―かな書き朝鮮語に着目して 研究代表者　許　秀美（本学任期制助教）

※2011（平成23）年度日本学術振興会科学研究費補助金（研究活動スタート支援）の採択により、2011年８月24日付発令。委嘱期間：2011年８月24日～2012年３月31日（但し、研究期間：2011年８月24日～2013年３月31日）

2010(平成22)年度「一般研究」研究結果概要

共同研究

元朝～明朝初期の言語接触に関する文献学的研究

研究代表者・准教授　渡部　洋
（中国語・近世の中国語文法）

本研究班の目的は中国語とモンゴル語双方の言語を対照的に見ることのできる文献を用いて13世紀から14世紀にかけて中国で形成された「多言語環境」の言語接触状況を解明する上で必要なバイリンガル資料についての基礎データを作成することにある。幸いにも本研究班は、平成21年度に本学の真宗総合研究所より一般研究費が交付され、更に平成22年度より日本学術振興会から科学研究費補助金が交付されることとなり、こうした好条件のもと、数年にわたって合璧碑文や華夷訳語等の文献について研究を行ってきた。その結果、「少林寺聖旨碑」、「勅賜興元閣碑」、「達魯花赤竹公神道碑銘」、「張氏先塋碑」、「西寧王忻都公神道碑」等５件の碑文と甲種本『華夷訳語』の中の「詔阿札失里」「勅僧亦鄰真減卜」「誥文」「勅禮部行移應昌衛」「勅禮部行移安荅納哈出」「撒蠻荅舌里等書」「納門駙馬書」「脱児豁察児書」「失列門書」「捏怯來書」（２件）「曩加思千戸狀」等詔勅５件と書状７件を解読し終えることができた。

今後、上記の文献解読を通して知り得たデータを整理しデータベースの作成作業を行いながら、解読した碑文については順次研究紀要に発表していきたいと考えている。近く発表を予定しているものとしては、先に挙げた「達魯花赤竹公神道碑銘」についての訳注がある。「達魯花赤竹公神道碑銘」は1338年に立てられた達魯花赤竹温台（ダルガチジグンテイ）の碑文である。この碑文については、すでにクリーブスの訳注「The Sino-Mongolian Inscription of 1338 in Memory of Jing'ntei（1951年）があるが、クリーブスの時代からすでに半世紀が過ぎており、訳や注釈において不十分な点も少なくない。例えば、クーリブスは漢文に頼って翻訳する傾向があり、モンゴル語の言葉をそのまま訳せば＜粥＞となるものを、漢文の＜其食＞から＜food＞と訳している（本学教授・松川節氏の指摘）。また、＜有＞、＜有来＞、＜般＞等のような元代中国語の特徴ある言葉についての注釈もあまり詳しくはない。こうした例をみても当時の言語研究を行う上でクリーブスの訳注は

不十分と言わざるを得ず新たに訳注を作成する時期に来ているということは明らかである。

また、この碑文は歴史的な面でも研究価値を有しており、その訳注作成の意義は大きい。碑銘の冠頭に達魯花赤とあるが、この<達魯花赤>はモンゴル帝国時代の各支配地域に置かれた長官で広範囲にわたる大国家を支えるために必要不可欠な存在であった。ただ、その達魯花赤はモンゴル帝国成立時と比べると、その役割は大きく変化している。原山仁子氏の「元朝の達魯花赤について」(『史窓』所収1971年)によれば、その変化は当時の領地支配の政策と密接に関係しており、太祖チンギスハーンから世祖フビライハーンの前までは達魯花赤が長官として任される領域は非常に広く、担当地域の世侯を監督しながら軍隊、貢納、治安等を監視したという。しかし、世祖の代になると中央集権的な体制になり達魯花赤の権限も縮小されてしまう。この碑文の達魯花赤竹温台(ダルガチジグンテイ)は、至治3年42歳で亡くなったが、文宗の時代(1328年～1332年)に活躍し『元史』にもその名が出てくる。原山氏の言われるように世祖以後達魯花赤はその権限を縮小されていったが、では、世祖後達魯花赤はどの様な者が為りどのような扱いを受けたのか、こうした点について考えるとき、この「達魯花赤竹公神道碑銘」の訳注は参考資料として十分に役割を果たし得ると考える。

現在、この訳注は本研究班のメンバーそれぞれの尽力により完成しつつあるが、その内容においては、モンゴル語文の日本語訳と漢文の書き下し文及び日本語訳を付け、両言語双方を対照的に参照できるようにしている。また、モンゴル語及び漢文語彙の注については、モンゴル語、中国語、ペルシャ語、満州語等の言語に詳しい専門家が結集した本研究班の特徴を活かし、幅広い訳注作りを目指している。

甲種本『華夷訳語』については、詔勅、書状共ほぼ解読作業を終えている。この『華夷訳語』は1389年に刊行されたが、碑文と異なる書式でモンゴル語を漢字で音写し、その横に中国語の傍訳をつけた形となっている。このような書式は『元朝秘史』とよく似ている。但し、詔勅に限っては『元朝秘史』と違いほぼ一文毎に中国語の総訳が付けられている。この甲種本『華夷訳語』は傍訳に白話語彙を多用しているので当時の白話語彙の研究にも役立つであろうし、書状の内容から当時の明王朝とモンゴル族との関係を窺い知るなど歴史的な面での活用も可能であろう。

現段階では解読作業はほぼ終えたものの中国語の傍訳や総訳についていくつかの疑問点があり、検討を重ねている。例えば、傍訳に使われている白話的な語彙が『元朝秘史』のものと完全に一致するのかという点や詔勅で付されている総訳の違いなどである。総訳について具体的に言えば、第一番目の「詔阿札失里」ができるだけ漢文の体裁をとろうとしているにもかかわらず、第三番目、第四番目の詔勅の文になると総訳に白話の語彙がかなり使われ、漢文の体裁をとろうという意志が感じられないのである。どうしてそのような事が生じるのか、今後こうした問題を研究班のメンバーで検討し、一定の答えを出したいと考えている。

今後の本研究班の全体的な計画としては、課題資料の解読作業と碑文の訳注作成を進めながら、甲種本『華夷訳語』の研究成果をどのような形で研究紀要に掲載するのか検討していきたいと思う。

共同研究

日本における西洋哲学の初期受容 —清沢満之の東京大学時代未公開ノートの調査・分析—

研究代表者・教授　池上 哲司
(倫理学)

本研究の目的は、清沢満之(1863-1903)の遺稿中に発見された東京大学(および大学院)在学時代の哲学関係講義録と思われる自筆講義ノートの全体を翻刻してフェノロサを中心とする東京大学の外国人哲学教師たちの講義内容を公開することであり、この作業を通じて日本における最初期の哲学思想受容過程の一側面を解明することである。本研究は同名の科学研究費補助金交付研究として2010年度から2012年度にいたる3年間の研究期間をもつものであるが、研究実施計画として予め設定しておいた課題は以下のとおりであった。(1)講義録の編集(資料調査、外国人哲学教師資料作成を含む)、(2)講義録の思想的分析、(3)清沢における西洋哲学思想受容の思想的分析。これらのうち、(1)が2010年度の重点課題であった。

(1)については、(a)資料調査として、金沢大学附属図書館(2010年11月12日)、東京大学総合図書館(2010年12月6・7日、2011年2月5日)、早稲田大学演劇博物館(2011年2月4日)、国立国会図書館(2010年12月6

日、2011年２月５日）に出張をおこなった。まず清沢以外の筆記者によるフェノロサ講義録としては、まだ学界で存在を知られていない、金沢大学附属図書館蔵の「高嶺三吉遺稿」を本研究が初めてデジタルデータ化し、分析に着手した。高嶺三吉は1883年に選科生として東京大学に入学し、在学中の1887年に死去した金沢出身の学生で、ほとんど一般にその存在を知られておらず、当然ながら高嶺遺稿の内容についてもこれまで精査されていない。高嶺遺稿は大学ノート７冊、計3000頁に及ぶ講義録であり、少なくともそこには、フェノロサをはじめとする外国人教師による哲学関係の諸講義録、くわえて、支那哲学、印度哲学、精神病学といった哲学関係以外の諸講義録が含まれていることが明らかになった。高嶺の大学入学は清沢と同年であることから、高嶺による講義録の対象となった講義には清沢による講義録が対象とする講義と重複するものがあることが想定され、今後のわれわれの研究にとっても重要である。早稲田大学演劇博物館では坪内雄蔵（逍遙）の「坪内逍遙手書きノートブック」の一部をデジタルデータ化した。坪内の講義録は理財学と哲学史を内容とするとされてきたが、これとは異なる講義内容が含まれる可能性があることが明らかになった。国立国会図書館憲政資料室では「阪谷芳郎関係文書」を入手し、これまで阪谷筆記のものとしては報告のなかった社会学講義を含むことを確認した。その他、岡倉覚三（天心）による政治学、理財学、美学の講義録を『岡倉天心全集』第８巻（平凡社）より、井上円了の哲学（？）の講義録を『井上円了と西洋思想』（井上円了記念学術振興会基金運営委員会）より、市島謙吉の「フェノロサ哲学講義」を早稲田大学図書館Web上より入手した。以上の講義録は、清沢筆記の講義録編集時に必要な資料である。外国人哲学教師関係資料としては、東京大学総合図書館所蔵の資料を収集した。

次いで(b)編集作業としては、市島謙吉の「フェノロサ哲学講義」および清沢の講義録の編集に着手した。(a)(b)作業の進捗状況確認のため、(c)研究会を６度開催した（2010年６月９日、７月27日、９月21日、11月24日、12月１日、2011年２月15日）。このうち、12月１日の研究会には『フェノロサ社会学講義』の編者である元神戸女学院大学教授、秋山ひさ氏を講師として迎え、金井延筆記の講義録（Gordon Bunshaft, Beineckie Rare Books & Manuscripts Library, Yale University 所蔵）についての情報提供を受けた。また研究活動成果の一般公開作業の一環として、2011年２月25日に日本におけるフェノロサ研究の第一人者である埼玉大学名誉教授、山口静一氏を迎え、(d)公開講演会を開催した。(e)学術論文「東京大学外国人哲学教師資料」は2011年度刊行の『真宗総合研究所研究紀要』第29号に掲載する予定である。なお開設した本研究のHP（http://www2.otani.ac.jp/~manshi/）では、研究全体にわたる進捗状況を逐次、一般に公開した。

(2)と(3)については、(1)の作業がある程度進捗した後の2011年度以降の重点課題であるが、(3)関係として、清沢を介してフェノロサ思想の影響を受けた諸思想についての研究等の成果報告を、学会および研究紀要誌上において各研究者がおこなった。

共同研究

仏教と教育の関係性に関する批判的基礎的研究
—「慈育」構築の根拠を求めて—

研究代表者・教授　川村 覚昭
（教育人間学）

本研究では、仏教と教育の関係性を、従来の仏教的教育論に見られるような仏教の自己完結的な論理を教育へ応用する閉鎖的な立場ではなく、むしろ仏教の自閉性を破り、仏教を教育との対話の土俵に乗せて、開かれた立場から構築しようとするものである。従って、本研究では、複眼的に仏教と教育の関係性を考えるために、次の三つの課題を設定し、教育学、人間学、歴史学、心理学、そして仏教学の立場から学際的に研究することを目指した。すなわち、①仏教教育における仏教言語と教育言語に関する批判的多面的な研究、②仏教と教育の関係性の現状に関するフィールド調査と仏教教育言説の分析、③現代教育への提言と具体的な教育実践における仏教的教育の構想の実験的プログラムの作成、である。

本研究では、この三つの課題を考えるために、毎月例会を開いて共同研究者が研究発表をするとともに講師を招待して公開研究会を開催した。以下に、例会と公開研究会を時系列で示し、共同研究者の各自が報告した発表概要を掲載する。

第１回例会　2010年４月28日　研究会の概要について相談する。

第２回例会　2010年５月20日　公開研究会開催。講師上田閑照先生（京都大学名誉教授）、講

題「清沢満之とは誰か―当時において、そして現在の私たちにとって」

第3回例会　2010年6月2日　発表者　川村覚昭、発表タイトル「維新政府の宗教政策と島地黙雷の政府批判―我が国における近代教育成立の背景と島地黙雷の教育観―」

我が国の近代教育が成立する過程を維新政府の宗教政策との関係から捉えることは従来の研究では殆どなかったが、維新政府が、神道国教化と重なる仏教弾圧によって日本人の精神構造を根底から改造しようとしたことを考えると、その成立と深く関わっていること、また、島地黙雷の開明的な政府批判は却って維新政府の近代化を仏教の立場から推進したのではないかということ、そして維新期の宗教的軋轢が、現代の教育（人間形成）を考える場合の影となり、今日まで引きずっていることを明らかにした。このため仏教と教育の関係性を構築するためには日本の近代史全体を見直さなければならないことを確認した。

第4回例会　2010年7月28日　発表者　関口敏美、発表タイトル「仏教系私立大学における建学の精神および教育」

仏教系私立大学では、HPや大学案内などで建学の精神や理念をどのように説明しているか。建学の精神や理念に基づく宗教的科目や宗教行事がどのように実施されているか。大学規模ごとにグループ分けしてこの二点を分析した結果、大学規模が大きくなるほど一般大学に近づき（世俗化）、中規模以下の大学の方が特色ある教育を行う傾向があることが明らかとなり、仮説的に「総定員の規模による大まかな類型化が可能である」と考えられる。

第5回例会　2010年9月9日　発表者　山内清郎、発表タイトル「幼児教育と仏教性ついての臨床教育学的分析」

仏教系の幼稚園・保育所が、その独自性を打ち出す際、各園の教育課程（カリキュラム）の中の、どこにその特色（仏教性）があらわれるのかについて、幼稚園・保育所からの資料（要覧、ガイドブック、入園案内の冊子、その他）に基づき事例的分析を行った。その結果、仏教性があらわれる箇所を、「園の方針・保育目標にあらわれる場合」「保育の領域・内容（課業活動。また、広義には、園での宗教的な行事も含む）にあらわれる場合」「保護者や保育者への呼びかけとしてあらわれる場合」の各カテゴリーに分けられた。仏教系園の教育課程と仏教性の関係についての、より詳細な調査（園を訪問しての観察・インタビューなど）のための予備的研究である。

第6回例会　2010年10月6日　発表者　大野僚、発表タイトル「上田薫『宗教的情操と社会科』について」

戦前の教条主義的な教育の反省から、民主的な社会を建設するために出発した戦後新教育のなかでも、宗教的情操に関する上田薫の見解を紹介した。上田によれば、宗教的情操には3つの意義が認められ、特に公教育では信仰をもつにいたる資質という意味において育成可能となり、そのためには、社会科という教科で育成される宗教的情操の重要性を確認できた。

第7回例会　2010年11月17日　発表者　高山芳治、発表タイトル「社会科教育と公民的資質形成」

戦前、価値教育は修身科によって行われていた。敗戦後、修身科は国史、地理科と共に授業が一時停止された。その後、修身科は教科としてではなく、昭和30年特設道徳として復活した。その間、学校教育において価値教育を中心的に担っていたのは、修身、国史、地理、公民などの教科を統合する形で新設された社会科であった。社会科は知識と価値を二元的に育成するのではなく、社会生活の理解（社会認識）を通して、価値観、態度や技能などの公民的資質を育てようとしていたことを明らかにした。

第8回例会　2010年12月16日　公開研究会開催。講師　高田信良先生（龍谷大学教授）、講題「宗教的情操について」

第9回例会　2011年1月12日　発表者　田中久美子

田中は、フィールド調査の方法論を検討するため、関連の先行研究として、「幼稚園の屋内と屋外の遊び場面における幼児の仲間関係」（廣瀬聡弥・志澤康弘・日野林俊彦・南徹弘、心理学研究　2006年　第77巻　第1号 pp.40−47）を紹介した。本研究では、幼稚園内の屋内と屋外という二つの遊び場面における、幼児の遊び相手の多様性を比較した結果、①遊び相手は、3、4歳児では遊び場面といった環境からの影響を直接受けるが、5歳児では遊び場面に応じて能動的に選択されること、②屋外遊びは屋内場面とは異なる社会的能力の発達を促す可能性のあることがわかった。

以上の報告からもわかるように、今回の研究では、時間的制約もあって仏教と教育の関係性を構築する手が

かりと糸口を探り当てることで終った。今日、仏教の存在価値がその社会性の問題とともに問われていることを考えると、仏教が人間形成にとって重要な意味を持っていることが確認されない限り、社会的に認知されている教育の範疇にそれが取りこまれることはない。本研究の目的は、そうした関係性を探究することであり、今後ともこうした研究が継続してできる環境が整うことを期待したいと思う。

共同研究

浄土真宗における社会実践展開の再構築
―保育・教育・福祉への視座―

研究代表者・教授　佐賀枝 夏文
（社会福祉学）

◇研究の目的

仏教を端緒とする社会実践は数多ある。その中でも浄土真宗系は規模・内容ともに最大である。そこで本研究における全体構想は、浄土真宗、中でも真宗大谷派（以下、真宗とする）に立脚した社会的実践、特に保育・教育・福祉の３つの領域における歴史的背景と現状を調査し、厳密且つ重厚な真宗教学と社会的実践展開における課題を抽出し、そのことから、改めて仏教から広く社会へ提起することである。そのための①基礎研究から②実践研究を展開していく。そして現在までに、真宗大谷派が保育・教育・福祉の領域において、全国で実践展開している関係機関・学校等と研究協力関係を構築し、予備調査と資料収集を行った。

◇研究の展開

近代以降、真宗教学に立脚する真宗大谷派は、保育・教育・福祉の３つの領域に対して、具体的な社会的実践を展開し続けている。その中には、３つの領域における先駆的な事業展開も多くあり、現代に至るまで、その実践の基盤となっているものも少なくない。しかし、現状においては、その社会的実践の拡大において、所謂、実践と理念、すなわち真宗教学と乖離してしまい、その実践的根拠を見失ってしまっているものもある。それによる実践現場での混迷は、深刻かつ急務な課題となっている。

以上のような実践現場からの要請から、本研究では、真宗教学と社会的実践展開とが、如何に切り結び、真に社会に貢献していくことができるのかを、実践の場と密に連携しながら明らかにしていく。

真宗大谷派の実践の場としては、例えば教育事業では、現在、真宗大谷派学校連合は、大学８校、短期大学９校、高等学校19校、中学校５校、小学校１校、幼稚園１園の構成である。また保育事業においては、社団法人大谷保育協会があり、加盟園は幼稚園・保育園合わせて、現在約500園を抱え、実践を展開している。このように、真宗教学を背景とする多くの社会実践の場が、現に展開していることは、本研究において、他にはない大きなスケールメリットであると同時に、社会的責任は非常に大きく、本研究の課題である、真宗教学と社会実践の展開との切り結びを明らかにすることは急務である。

◇公開研究会

実践の場に立脚した研究を展開するために、共同研究員として真城義麿先生（前大谷中・高等学校校長）と脇淵徹映先生（社団法人大谷保育協会理事長）に加わっていただき、公開研究会や各現場との研究連携を展開する基盤を確立した。

<教育部門>

その上で教育部門では、長年真宗教育に尽力された元大谷中・高等学校校長の広小路亨先生の教育実践を取り上げて、大谷中・高等学校からは上寺文美氏、京都光華女子中・高等学校からは高田正城氏、東大谷高等学校からは大間実氏、大成高等学校からは城金明生氏を中心として、４回の公開研究会が行われた。

①テーマ：「真宗と教育実践　―現場からの経験をとおして―」
講　師：真城義麿（大谷中・高等学校校長）
②テーマ：「広小路亨先生に学ぶ　―真宗教育の今後について―」
講　師：宮城　駿（真宗大谷派関係学校連合顧問）
②テーマ：「広小路亨先生に学ぶ　―真宗教育の今後について―」
講　師：多田孝圓（元大谷中学高等学校校長・現真宗大谷派圓乗寺住職）
④テーマ：「広小路亨先生に学ぶ　―真宗教育の今後について―」
講　師：福島和人（大谷専修学院講師）

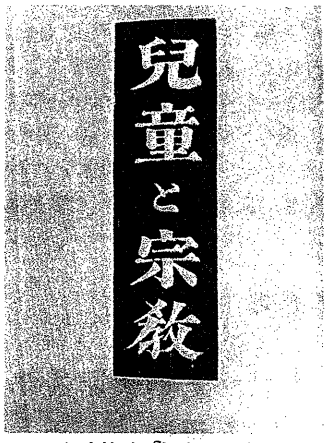
<保育部門>

真宗保育に関しては、常に真宗大谷派宗務所教育部と㈳大谷保育協会と常に連携しながら、様々な研究活

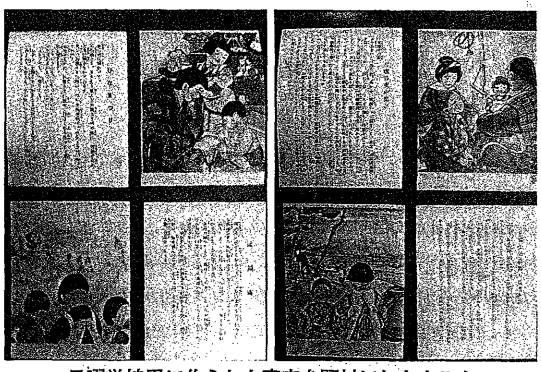
動を展開している。その中で本研究班として研究展開の一つとしては、文献資料の収集と整理が挙げられる。

真宗大谷派の保育事業は、わが国の保育事業の中でも先駆的な展開をしてきた。その歴史を文献資料の整理や㈳大谷保育協会に長年関わってこられた方々へのヒアリングをとおして、真宗大谷派の保育「真宗保育」の歩みを整理している。

多くの先駆的な保育雑誌や教材等が発行・制作されてきたが、そのほとんどが散逸してしまっているのが現状であり、貴重資料の収集は急務であった。その貴重資料を長崎県佐世保市の西心寺に所蔵されており、研究調査に赴き、貴重書の確認と借用をお願いし、製本管理することができた（写真参照）。



保育雑誌『児童と宗教』



日曜学校用に作られた真宗を題材にしたカルタ

<福祉部門>

真宗大谷派は明治期において、多大な社会貢献の足跡を残している。大谷派慈善協会による雑誌『救済』の出版、その後の仏眼協会による点字雑誌『仏眼』の出版は輝かしい業績として高く評価されている。このような「あゆみ」をもった真宗大谷派の社会福祉の実践、その理念について先人の業績を顕彰すること、また基盤整備をすすめることが目的のひとつである。具体的な先人としては、「中村久子」を取り上げ研究調査した。

また真宗大谷派の関わった重要な福祉事業として、「仏眼協会」がある。協会の背景には、僧侶和田祐意の存在がある。和田は、高齢者施設「京都養老院（現・同和園）」（京都仏教護国団の清水寺・大西良慶師の発意）の設立の専任職員として着任したが、中途視覚障害者となり、視覚障害者の救済へあゆみだした。

この京都仏眼協会の事業展開には、「点字」の仏典作成、「点字月刊誌」『仏限』の発行、出版のための「弘誓社」設立などがある。この事業は現在の京都ライトハウスの出版部へと引き継がれていくのである。また当然の事業展開として、「視覚障がい者」の生活を支えるための事業、鍼灸師の養成（仏眼厚生学校の設立運営）も展開される。さらに事業は、眼病に対する治療施設としての眼科医院の設立へと展開していくのである。この展開は、わが国から「眼病トラホーマー」を撲滅することに大きく貢献したのである。

この仏眼協会の事業展開は、仏教の教えから社会福祉事業を展開する「実践モデル」、「起業モデル」、「ソーシャルアクションモデル」として重要な意味を持っていることを、本研究は研究調査をとおして明らかにしたのである。

共同研究

線分交叉を伴う系図表示の基礎的研究

研究代表者・准教授　柴田 みゆき
（情報処理学）

本研究は複雑な系譜関係についてコンピュータを利用し、効率よく格納・提示する方法を検討するものである。諸分野においてコンピュータ化がすすんだ現在、内容の簡便な整理・検討のためにテキストの電子化や、それをデータベース化する手法などが用いられている。しかし系図は、データ表示の方法が多岐にわたるため、紙媒体上の表記を単純にコンピュータ上に移植することが困難である。

既存の系図表示ソフトウェアでは、プログラミングなどの問題から同一個性を２箇所以上に配置すること

で線分交叉を避けている。線分交叉を可能としても不十分であったり、個性を自由に配置できないソフトウェアもある。さらに、シームレスな拡大縮小および全方位移動を可能とする機能をもつソフトウェアは存在しない。

翻って、人文科学分野における系図表記では、個性を１箇所に１度だけ配し、関係が複雑になった場合には、線分交叉をさせてでもその表記ルールを貫徹する。そのようなソフトウェアはやはり存在しない。そこで我々はこのようなソフトウェアの構築を目指した。

2008年度真宗総合研究所一般研究に採択された研究成果として、系図表示ソフトウェアのプロトタイプシステムMaSSRiDGe（Magnifying And Simplifying System for RetrIeve and Display GEnealogy）を開発した。これにより、系図情報のシームレスな拡大・縮小表示と表示・非表示を実現した。しかし、MaSSRiDGeでは線分交叉による系図表示が不十分であったため、線分交叉の最小単位を調査した。

2009年度には、線分交叉を伴う系図表示を行うためのデータベース設計コンセプトWHIteBasE（Widespread Hands to InTErconnect BASic Elements）を構想し、学会で発表した。

2010年度真宗総合研究所一般研究に採択された研究成果は、以下の５点である。

第１に、WHIteBasEを用いた系図表示ソフトウェアを実装した。WHIteBasEは基本的に、婚姻関係と子の発生を一つのイベントとして統合管理するための不可視結節点である。すなわち、個性データは直接他の個性データから一切参照されず、WHIteBasEからのみ参照される。この結果、従来のデータベースに比べて相互参照のリンク数を低減させうることを理論的に証明した。

第２に、WHIteBasEを一系系図表示に対応させた。

第３に、WHIteBasEの拡張と汎用性について、2010年８月と、2011年３月の２回にわたり、北海道大学東京サテライトオフィスにおいて、それぞれ３日間の会議を行った。

第４に、上記研究成果に対する学会発表および論文誌収録の成果を得た。まず、2010年10月、ポーランドのUniversity of Science and Technologyにおいて開催された学会International Conference on Computer Information Systems and Industrial Management Applications（CISIM）において、Windows XPマシン上で動作するWHIteBasEを発表した。あわせて国内の研究会への発表として、情報処理学会第89回人文科学とコンピュータ研究会において発表し、国内の研究者からさまざまな要求を得た。この発表の詳細は、『情報処理学会研究報告2010−CH−89』に収録された。また、2011年３月、CISIM発表の詳細は英文電子ジャーナル"International Journal of Computer Information Systems and Industrial Management Applications（IJCISIM）"に収録された。さらに、2011年３月、東京工業大学で開催された情報処理学会の第73回全国大会において、WHIteBasEの一系系図表示の構想をその実装ソフトウェアとともに発表した。あわせて、養子縁組関係を表示するための前提と構想を発表した。この２本の発表要旨は、『情報処理学会全国大会第73回講演論文集』に収録された。

第５に、本年度の研究成果をまとめた研究成果報告書をPDF文書で完成させた。

ところで、WHIteBasEは、Windows XP を動作対象として現在構築されている。2010年度の研究目標としては、他OSへの移植をあげた。しかし、このための基礎研究の準備段階で、研究年度が終了することとなった。また、系図表記のバリエーションは多分野において多岐にわたり、研究が尽くされたとはいえない。来年度以降も、これらについてさらに研究をすすめるとともに、WHIteBasE の改良を続けていく予定である。

当該部分については、研究

所報 No.66 P.28 に掲載。

共同研究

ポタラ宮所蔵スティラマティの倶舎論注釈書『真実義』の新出梵文写本研究

研究代表者・名誉教授　小谷 信千代
（仏教学）

チベット自治区（ポタラ宮、ノルブリンカ宮）に膨大なサンスクリットの仏教写本が保管されていることが確認され、ウィーンのオーストリア科学アカデミー・アジア文化思想史研究所と北京の中国蔵学研究中心との協力により、それら仏教写本解読の準備が整った。そこで、本研究は、アビダルマ研究を専門とする研究者と、写本研究を専門とする研究者とによって、ポタラ宮に所蔵されているスティラマティの倶舎論注釈書『真実義』サンスクリット写本の解読を目的として組織された。

スティラマティ（安慧）の注釈書『真実義』は、イ

ンドで著された『倶舎論』注釈書のなかで最も大部で詳細な内容を持つ重要なものである。漢文や古代ウイグル文で部分的に現存するものの、サンスクリット原典は散逸したと思われてきた。今日までチベット語訳によって部分的に解読が試みられてきたが、チベット語訳の不十分さ、難解さ故に、十分な解読研究が行われてきたとは言い難い状況であった。一方、古代ウイグル文『倶舎論実義疏』は、庄垣内正弘博士によって解読がなされ、その研究成果はすでに公になっている。なお、チベット語からのモンゴル語訳が現存するが、その解読研究は皆無である。

現在のところ倶舎論注釈書『真実義』写本は一般に公開されておらず、また『真実義』写本は一本しか現存しない。そこで、写本のなかで文字がどのように筆写されているかできる限りそのまま研究者に提示するためにDiplomatic Editionを提供すると同時に、批判版のテクストCritical Editionを準備するという方針を採る。これはオーストリア科学アカデミーと中国蔵学研究中心との共同研究プロジェクトにおける現時点での基本方針である。

(1)本研究では、写本外形の特徴、章の区切りにチベット文字（ウメ）で記されているごく短いコロフォンをまず確認した。

当該写本は悉曇文字で書かれ、書写年代は９世紀を下らないと推測される。写本全体は三つに分けて書写されたことが推測される。写本の最初の部分（写本Aと呼ぶ）と最後の部分（写本Cと呼ぶ）が現存し、中間部分（写本Bと呼ぶ）である第２章途中から第４章中程までを欠く。チベット語訳コロフォンには、チベット語訳された際に用いられたサンスクリット写本についての記述があるが、そこに記された写本の欠落箇所と本研究で参照することができた写本とは見事に一致する。よって、翻訳時に用いられたサンスクリット写本の概況についてのチベット大蔵経コロフォンの記述を裏付ける資料である。

また、チベット語訳コロフォンに記される通り、現存するチベット語訳は、完全なものとは言い難く、いくつかの問題を持つ。ときには、サンスクリット文をチベット文字で音写してさらに暫定的な訳を割注として付すという措置をとる場合がある。それらの箇所に対応するサンスクリット写本の文章を参照するも、写本の状態が悪く判読できない場合や、文章の意味を確定できない場合があった。

ともあれ、チベット文が訳文として不十分である箇所と、対応するサンスクリット写本のうち不明瞭である箇所との一致は、当該写本がやはりチベット語訳された際に用いられた写本であることの証左になると思われる。

(2)本研究では、写本Aの第１章「界品」注釈文のうち、23葉分の解読を終え、その試訳を作成した。

ダルマパーラバドラによって15〜16世紀に翻訳されたと言われる『真実義』チベット語訳と、北京図書館所蔵の敦煌出土漢文『倶舎論実義疏』はもちろんのこと、『倶舎論』本論とヤショーミトラやプールナヴァルダナの注釈文、そしてサンガバドラの『順正理論』やスティラマティの『五蘊論釈』などを逐一参照して校訂作業を行った。

多くの平行句を同定し、これまでチベット語訳のみでは明らかにすることができなかった文章を読み解くことができた。とりわけ、スティラマティが『順正理論』の文脈を熟知したうえで、『倶舎論』を注釈しようとしていることがより鮮明に浮かびあがってきた。これは『順正理論』研究においても非常に重要な文献学上の成果であると言える。また『五蘊論釈』との平行句も見出され、『真実義』と『五蘊論釈』とは相互に参照しておく必要があることをあらためて確認した。

さらに、サンスクリット写本とチベット語訳とを検討するなかで、例えば以下のような顕著な特徴に注目しておく必要がある。チベット語訳では、mdo sde pa（経量部）と記されるにも関わらず、サンスクリット写本では、sūtrakāra（経主）となっている場合があった。その議論に対応する『順正理論』本文にも「經主」とあり、サンスクリット文と一致する。本研究で確認できたこのようなケースが、テクスト全体にわたり複数あるとするなら、これまでチベット語訳に基づいて経量部の説と了解されてきたものは、再検討されなければならなくなる。そして『順正理論』の記述を再評価するという点においても、このサンスクリット写本は極めて重要である。

(3)本研究の主目的である『真実義』写本解読には、多くの関連するアビダルマ文献の参照が必要不可欠である。本研究では開始当初から、それら関連する文献の整理・電子化を基礎作業として位置付け取り組んできた。具体的には、『真実義』チベット語訳の電子テクストを作成（外部に依頼）した。あるいは、プールナヴァルダナの倶舎論注釈書チベット語訳に『倶舎論』本論の対応箇所などを書き込んだノートを作成し、また『倶舎論』諸訳対照ノートを作成した。それらはPDFファイ

ルにしておくことで、容易に共有できるようにしている。なお、データはCD-ROM、DVD-ROMに収め、必要とする研究者に配布している。これら諸文献の整理と電子化は本研究の副次的なものであるが、ひろくアビダルマ研究者に資する関連資料の作成は重要な基礎的研究の成果であると言える。

共同研究

石刻史料からみた宋元時代華北地方における仏教の社会史的変遷に関する基礎研究

研究代表者・教授　桂華 淳祥
(東洋史学)

本研究は、宋元時代の華北地方における仏教と社会との関わりの歴史的変遷について、複数の研究者の参加を得て、中国史の視点に加え、当時華北を領有していた遼・金・元といった異民族の支配体制や、朝鮮半島および日本との交渉など周辺の諸民族あるいは地域との関係という視点から、仏教関係石刻史料の蒐集と整理を中心として問題分析を行って当該研究の基礎データを充実させることを第一の目的とする。

具体的な活動としては、まず既存および最近刊行された石刻史料集に収録される当該時代の河北・河南・山東・山西各地域の仏教関係石刻史料の検索を進めつつ、研究班員を中心として会読を行い、上記作業で得られた碑刻について、その内容を検討して重要と思われる記事を抽出している。

会読は前年度に引き続き月に1回のペースで行い、「大金故慧聚寺厳行大徳閑公塔銘」金・貞元元年（1153)、「大金大興府良郷県金山院比丘尼了性霊塔記」金・貞元2年（1154)、「当寺故禅人度公幢銘」金・正隆元年(1156)、「寂照大師実行碑記」金・明昌2年（1191)、「廣公禅師塔記」金・泰和2年（1202)、「相了禅師塔銘」金・泰和4年（1204)、「宗主大師塔銘記」金・大安2年(1210)、「中都竹林禅寺清公塔銘」金・至寧元年（1213)、「住持無為懃公道行之碑」元・後至元6年（1340）などについて検討した。

もう一つの活動である現地調査は、中国山西省交城県において行った。この調査では、従来全く知られず10年前にはじめて解光啓氏（交城県文物管理所）によって紹介された「円明禅院碑」を同氏の案内のもと実見し、碑刻はもちろんのこと、その置かれた現状を克明に記録できた。この碑刻は、華北に行われていたとされる曹洞宗の流れで空白となっていた部分を相当量補うことができるだけでなく、当時の仏教界と統治者との関係を如実に示す史料として意義あるものであり、まさに当該研究領域に新たな息を吹き込む貴重な資料である。

さらに本研究は、日本学術振興会より基盤研究（C）として平成20年度から科学研究費補助金が交付されたプロジェクトであって、本年度が最終年度に当たるため、その成果報告の作成も行った。それは指定された研究期間（3年）内に実施した現地調査での成果を踏まえ、研究会で検討した27の碑刻の全文を録文・解釈し、そこに記される重要な語句に注を付したもので、「金元代石刻史料集—華北地域仏教関係碑刻（一）—」として『真宗総合研究所研究紀要』28号（2011年3月）に掲載された。本研究の成果が集約されていると言えよう。ただ関係碑刻はこれだけにとどまらない。期間内に検討し尽くせなかった碑刻については、新たな機会を得て続編として公刊する予定である。

上記基盤研究（C）として行ってきた本研究は、早くより着目され、また近年には新たな史料が紹介されるようになった石刻史料を用いて、①従来の研究では史料が乏しいことからいまだ十分な歴史事象が把握されず空白の時代として扱われてきた宋元時代の華北仏教界の実態を究明すること、②そこに現れる事象が「仏教のネットワーク」として広域に及ぶものであることの提唱を大きな目標とし、その基礎研究として史料の蒐集とその詳細な検討を重ねてきた。先に挙げた史料集がその成果の一部であるが、①については、そこに示した碑刻などから当該地域に行われていた仏教の流れをより明確にする記事が少なからず得られており、その動向の詳細を跡付けつつある。また②についても、複数の碑刻を対比させて検討すると、地域を隔てていても相互に関連性を持つことを窺わせる記事が散見された。こうした事象は、中国にとどまらず東アジア社会全体にわたる仏教活動を究明するために見逃せない極めて重要な意味を持つと考えられ、東アジア仏教史研究のさらなる展開を導く糸口となろう。今後もこのような事柄を視野に入れた実態の究明を課題として、引き続き基礎研究である史料の蒐集と検討を進めていきたい。

共同研究

世界遺産エルデニゾー僧院に関する総合的研究
—過去の復元から未来への保存へ—

研究代表者・教授　松川　節
（東洋史学・人文情報学）

モンゴル国に現存する世界文化遺産エルデニゾー僧院の保存・保護に向けて、「過去の復元」（考古学・歴史学）、「現在の利用」（建築学・文化人類学）、「未来への保存」（文化財保存科学・仏教美術史）という３つの観点から、基礎研究と現地における本調査を行った。基礎研究及び現地調査（2010年４月29日～５月７日、８月10日～８月17日、９月13日～９月22日、12月25日～12月30日）の成果は５月22日及び10月23日に大谷大学にて開催された研究集会にて報告された。

2010年度の現地本調査は、１）アルタン・ソボラガ仏塔の２面の摩耗碑文（モンゴル語・チベット語）のレーザー光による解読　２）エルデニゾー内のゴルバンゾー寺の保存修復状況の調査と提言　３）ゴルバンゾー寺の計測と、その起源をめぐる建築史的研究　４）ゴルバンゾー内のガンザイ壁画の模写作成と研究　５）エルデニゾー院内の考古学的発掘調査による成立過程の研究、以上の項目について行われた結果、１）については16世紀末に建立されたこの寺院が18世紀にいかに発展していたかが解明されること、２）本寺院は2004年に世界遺産に指定された後、現在に至るまでの保護・保存において問題が検出されていること、３）従来、エルデニゾー僧院は内モンゴルの寺院をモデルに設計されたと考えられていたが、今回の比較研究により、そうではないことが判明したこと、４）守護神に供物を捧げる様を描いた仏教的ガンザイ壁画をチベットのものと比較することにより、モンゴル的要素を抽出できると判明したこと、５）エルデニゾー立地点における８世紀～20世紀までの考古学的文化層について基礎データを収集したこと。以上の成果を得た。一方、エルデニゾーの成立史に関わる18世紀の未発表文書２件については、出版権処理が滞り今年度中には公表できなかったが、これは2011年度に公表できる目処が立っている。

個人研究

変動期の社会における法秩序の再構築
—南アフリカとカンボジアの比較社会学的研究

研究代表者・准教授　阿部 利洋
（社会学）

紛争後の変動期にある社会は、紛争再発を防ぎつつ、社会を再統合しようと試みる——法秩序を回復する、相互不信・憎悪の集合感情を緩和・改善する——際に、大別すると「和解か正義か」という選択に直面する。

和解という理念を反映する代表的な取り組みが「真実委員会（truth commission）」と呼ばれる活動であり、加害者の裁決を留保する代わりに、被害者から広く証言を聴取し、各地で公開フォーラムを開催し、過去に関する包括的な報告書を作成するところに特徴がある。これまで、チリ、ペルー、東ティモール、ナイジェリア、リベリア等で実施されてきた。一方で、正義を目標とするケースの多くは、国連主導の下、外国人法曹関係者が関与する特別法廷を設置してきた。シエラレオネ、旧ユーゴスラビア、ルワンダのケースを参照することができる。本研究の対象社会として挙げている、アパルトヘイト後の南アフリカは和解を、クメール・ルージュ体制下の虐殺とその後の内戦を脱したカンボジアは正義を、それぞれ選択した社会として注目されてきた。

本研究は、こうした対照的な二つの社会を比較・検討することにより、次の３点について明らかにすることを目的としている。

(1)法秩序・法規範が不安定な変動期の社会において、どのような形で司法の再構築が図られ、あるいは法の適用が行われているのか。

(2)当該社会の人々は、そうした司法および法に関する取り組みをどのように受けとめているか。

(3)司法および法をめぐる上述の現実は、紛争を経た社会という条件の影響を被っているのかどうか。法秩序・法規範が不安定な変動期の社会に特有の傾向が見出されるのか。

上記の(1)と(2)は、本研究が採用する社会学的なアプローチを反映する問いであり、より具体的には「和解や正義といった理念が、当該社会の内部では、どのよ

うなアクターの影響を受け、どのような解釈を付され、どのような機能を果たしているのか」という視点に答えようとするものである。考察の過程では、たとえば当該社会において、正義の実現を目指す当初の目的とは異なる方向性をもった現実が継起する状況も視野に入れている。

その上で、(3)において理論的に新たな知見を提供するところまでもっていきたい。現時点での出発点としては、「近年の紛争は勝敗を明確にしないまま収束する傾向があるため、紛争後の社会には依然として勢力の偏在が残り、法多元的な状況が出現する素地を形成する」というものである。ここで仮に、「法多元的な状況」を「複数の法的規範が交錯・交渉する状況」と解するならば、その状況を社会学的な論理をもっていかに記述できるかというのが、理論的な課題である。

このような枠組みにおいて実施された2010年度の研究内容は、大きく分けて実証的な課題と理論的な課題から整理することができる。南アフリカ社会に関する実証的な課題としては、警察改革の実態を、とりわけコミュニティ・ポリシング・プログラムに注目することから検討することを、カンボジア社会に関する実証的な課題としては、クメール・ルージュ特別法廷への市民参加を多角的に推進するNGOの活動を取り上げることから把握することを、それぞれ設定し、現地調査を行った。南アフリカでは、ダーバン・ケープタウン・ジョハネスバーグの3都市においてコミュニティ・ポリシング関係者から聞き取りを行い、いくつかのプロジェクトに同行した。カンボジアでは、二つのNGOによるアウトリーチ記録資料を閲覧し、それにもとづき「特別法廷の社会的受容」をテーマに現地研究者らと意見交換を行った。この結果、次年度の調査課題として、南アフリカのケースでは「南ア国民と移民との関係」に焦点をあてる必要性、カンボジアのケースでは「特別法廷の表象に関して、とくにカンボジア国内のマスメディアの報道の傾向」に着目する必要性、が明らかになった。これらは、現地における実態を、より一般化されたフレームのもとで比較・考察するために必要なステップである。また、理論的な課題であった「移行期正義に関する先行研究の整理」については、関連文献の批判的読解に加えて、*International Journal of Transitional Justice* 誌（Oxford Univ. Press、2007年創刊）にこれまでに掲載された87論文に対する詳細な検討を行い、移行期正義分野の形成過程と、現在の理論的動向を把握した。

2010年度の研究成果は以下のとおりである。

①論文4点

1．「真実和解委員会（TRC）を通じた和解の模索――その限界と意義」『南アフリカを知るための60章』（峯陽一編、第12章分担執筆）、2010年4月、明石書店
2．「南アフリカの真実和解再考」『紛争解決――アフリカの経験と展望』（川端正久・武内進一・落合雄彦共編、第10章分担執筆）、2010年5月、ミネルヴァ書房
3．「クメール・ルージュ特別法廷と移行期の正義」『大谷学報』第89巻2号（大谷学会）、2010年7月
4．Promoting Reconciliation Socially, *Searching for the Truth*, No. 129 (Documentation Center of Cambodia, Phnom Penh, Cambodia)、2010年9月

②口頭発表4回

1．「真実と和解――過去と向き合う」、京都精華大学・アフリカ学講座（於：京都精華大学Shin-bi)、2010年6月
2．「「紛争後社会における和解」論の現在」、第83回日本社会学会大会（於・名古屋大学)、2010年11月
3．「南アフリカのコミュニティ・ポリシングとSSR――紛争後の治安回復へ向けた制度構築」、アジア経済研究所「中東・アフリカにおける紛争と国家形成」研究会（於・東京外国語大学)、2010年11月
4．Contesting on Undefined Concept of Reconciliation, Symposium on "Contextualizing Post-reconciliation Violence: Globalization, Politics and identities in Africa" (Embassy of Japan in Kenya, Nairobi)、2011年1月

個人研究

民族文化祭の比較研究

研究代表者・教授　飯田 剛史
（社会学）

本年度調査・研究活動日程の報告。研究の知見については、今後の研究報告、論文で行う。

1．2010年4月8日真宗総研で、日・仏シンポジウム予備報告
2．2010年5月5日・6日：大谷大学・Center National

des Recherche Scientifique
合同シンポジウム『日・仏における宗教とナショナリズム』：参加、報告
飯田報告テーマ「現代日本における多文化共生主義と排外主義」

3．2010年６月１日　真宗総研・国際研究グループ・ミーティング出席
4．2010年７月25日　大阪、龍王宮祝祭　参観
5．2010年８月１日　科学研究費プロジェクト『民族文化祭の総合的研究』
第一回ミーティング（於大谷大学）
6．2010年８月９日　東アジア宗教文化学会理事会出席（於天理大学）
7．2010年９月３/４/５日　日本宗教学会出席（於東洋大学）
8．2010年10月３日　科学研究費プロジェクト『民族文化祭の総合的研究』
第二回ミーティング（於大谷大学）
9．2010年11月３日　京都・東九条マダン調査
10．2010年11月７日　ボーズビーアンビシャス　参観（於　京都　誓願寺）
11．2010年11月14日　伊丹マダン調査
12．2010年11月22・23・24日　下関リトルプサンフェスタ調査
13．2010年11月26日　東九条マダン委員会出席
2012年度全国民族祭りシンポジウム協力を提案し承認される
14．2010年12月５日　科学研究費プロジェクト『民族文化祭の総合的研究』
第三回ミーティング（於淡路文庫）
15．2011年１月29日　宗教社会学の会出席（於大阪大学）
16．2011年１月30日　科学研究費プロジェクト『民族文化祭の総合的研究』第四回ミーティング（於淡路文庫）
17．2011年３月６日　シンポジウム『共生社会における宗教の役割』出席
（於同志社大学）
18．2011年３月19日　金容海先生・イルムの会出席
19．2011年３月27日　芦屋マダン調査

個人研究

世界史における東アジアとアフリカ
―国際共同研究のための基盤形成―

研究代表者・准教授　古川 哲史
（歴史学、比較文化・社会論）

本研究は筆者が現在まで取り組んできた＜第二次世界大戦期までの日本－アフリカ関係史＞の研究成果を出発点に、対象地域を東アジア（主に中国、朝鮮半島、日本）にひろげて、19世紀末から20世紀半ばにおける東アジアとアフリカの関係を世界史的な視点から明らかにすることを目的とする。従来、世界史あるいはアジア史やアフリカ史において、個別に扱われてきた諸相を繋ぐ接続性を見出す作業であり、その「接点」や「接線」について歴史学的考察を試みる。本研究は、理論かつ実証面での個人研究活動であるとともに、この大きなテーマを国際的な規模で論じるための国際共同研究を組織、開始させる意図もある。さらには、筆者の将来的課題の一つ＜世界史における東アジアとアフリカ、アフリカ系ディアスポラの研究＞（East Asia, Africa, and the African Diaspora in World History）に結びつけるという展望を持つ研究である。

本研究の基軸のひとつとなる日本－アフリカ関係史の研究は、日本におけるアフリカ史学の乏しさもあり、先行研究はまだ少ない。筆者は今まで、アフリカ諸国や欧米などの研究者による関連研究も含めて、その既往の研究概観や意義・問題点の分析をいくつかの機会で行ってきた。（例えば、拙稿「2007年の歴史学界：回顧と展望――アフリカ」、『史学雑誌』117編第５号、史学会、2008年、同「日本－アフリカ交渉史の諸相を考える――いくつかの研究課題と展望」、『アフリカ研究』72号、日本アフリカ学会、2008年、同「書評：藤田みどり『アフリカ「発見」』岩波書店、2005年」、『アフリカ研究』68号、2006年、等である。）日本－アフリカ関係史あるいは関係論研究では、関係が生じた時期の特定など、基本的な事実関係が曖昧なままにされている場合があり、それが他の研究者の論考にまで引用・利用されている問題もある。したがって、本研究では先行研究で使われている史・資料の再検証作業をしつつ、時代区分や対象地域設定という問題も含めた理論面での研究、そして、いくつかの重要な事例に焦点を当てた実証研究

を行っていく。

研究計画の初年度にあたる本年は、主たる活動として、先行研究の調査・収集およびその概観と検証を行うとともに、関連の史・資料や情報の収集を国内外で続けた。(これらは次年度以降も継続して行われる作業である。)なお、本年度に公刊した関連の拙稿に、アメリカ合衆国のMLA(米国現代語学文学協会)の部門誌*African American Review*での、本研究テーマの重要性にも言及した書評 Furukawa Tetsushi, "Anne C. Bailey, *African Voices of the Atlantic Slave Trade : Beyond the Silence and the Shame* (Boston : Beacon Press, 2005) & Shane White and Graham White, *The Sounds of Slavery : Discovering African American History Through Songs, Sermons, and Speech* (Boston : Beacon Press, 2005) ," *African American Review*, Vol.43, No.1, pp.195–197. がある。また、「ラウトレッジ版アメリカ歴史地図」シリーズの一巻であり、アフリカ系アメリカ人の歴史を地図や図表、写真とともに概説した Jonathan Earle, *The Routledge Atlas of African American History* (New York and London: Routledge, 2000) を、共訳書『地図でみるアフリカ系アメリカ人の歴史——大西洋奴隷貿易から20世紀まで』(明石書店、2011年3月)として出版した。

個人研究

京都北山の地形・地質形成と文化

研究代表者・講師　鈴木 寿志
(地質学・古生物学)

京都市北部の松ヶ崎には、標高130〜186mの丘陵が東西に連なっており、京都盆地の北縁を画している。この松ヶ崎丘陵のうち、深泥池の南に頂をもつ山を松ヶ崎西山、妙円寺大黒堂の北に頂をもつ山を松ヶ崎東山とよぶ。松ヶ崎丘陵の南側山腹は比較的急な斜面をなしており、この地形を活かして毎年お盆の8月16日には「京都五山の送り火」の一つである「松ヶ崎妙法送り火」が催される。「妙」の字と「法」の字は、大文字山の「大」の字に続いて20時10分に同時に点火される。両方の字は遠方からは並んで見えるが、実際には1kmほど離れて位置している。松ヶ崎西山に「妙」の字が、そして松ヶ崎東山に「法」の字が、それぞれ丘陵の南斜面に大きく描かれているため、京都の中心部からよく見えるし、また上空からも大きな文字がくっきりと浮かび上がって見えるであろう。お盆に迎えた御精霊を再び送り出す際に焚かれる送り火として、天高くまでお送りする意味で丘陵地形は絶好の立地条件であったと思われる。

このような京都の伝統的な仏教行事を支えている丘陵地形は、どのようにして形成されたのであろうか。松ヶ崎丘陵の地形形成の鍵を握るのが、丘陵を構成している地質である。そこで筆者は松ヶ崎丘陵の地質調査を行い、岩相分布を明らかにするとともに、岩石の形成年代を明らかにするため、岩石試料を収集し、化石の検出を試みた。その結果明らかになった点をここに記述する。

松ヶ崎丘陵の地質について、2500分の1地形図を用いて現地調査を行った。その結果、松ヶ崎丘陵のほとんどがチャートからなることが明らかになった。ただし丘陵の南縁部では泥岩や砂岩泥岩互層の露頭が観察された。また丘陵東南部では比較的厚い珪質泥岩の露出が確認された。これらの地質はいずれも東西からN70° Wの走向を有し、50〜80°で北に傾斜することが多い。ただし走向・傾斜はこの範囲から外れる場合も認められた。

チャートは主に黒色を呈し、稀に赤色を呈する。チャートは単層厚数mm〜7cmで層状をなすことが多い。岩石薄片を作成し顕微鏡下で観察すると、再結晶が著しいものの、放散虫化石が多く含まれる様子が観察された。比較的再結晶の程度が低いとみられたチャート6試料について、希フッ化水素酸による放散虫・コノドント化石の個体分離を試みた。実体顕微鏡下で溶解残渣から放散虫化石を拾い出し、電子顕微鏡で観察した結果、松ヶ崎東山の頂部附近から採集した赤色チャートから放散虫化石*Triassocampe coronata* BRAGIN 1991および*Pseudostylosphaera* sp.が得られた。これらの放散虫化石は中生代三畳紀中世アニス期の年代(約2億4000万年前)を示唆する。

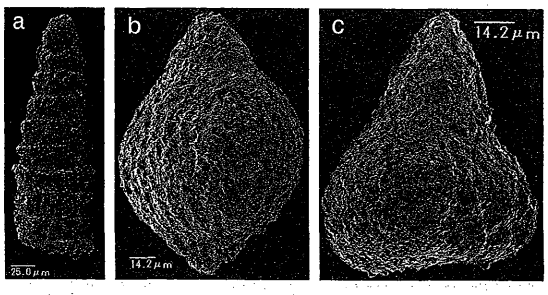
泥岩および砂岩泥岩互層は、宝が池公園スポーツ広場の東に位置する民地の駐車場から松ヶ崎小学校にかけて、ならびに七面祠、湧泉寺、大黒堂にかけての丘陵南縁に沿って分布する。泥岩は黒色を呈し、一般にシルト質である。また砂岩は細粒から粗粒まで様々で、泥岩と互層する場合は35〜50cmの単層厚を示す。なお白雲稲荷神社の尾根では泥岩中にレンズ状の砂岩が混在する様子も観察された。

白雲稲荷神社の尾根には比較的厚い珪質泥岩が露出しており、その中から保存は良くはないものの同定可能な放散虫化石が検出された。検出にあたっては、チャートと同様の希フッ化水素酸を用いる方法に従っ

た。電子顕微鏡観察の結果、同定された放散虫は次の通りで、中生代ジュラ紀中世末カローブ期の年代（約１億6300万年前）を示唆する：*Archaeodictyomitra* cf. *minoensis* (MIZUTANI 1981)、*Archaeodictyomitra rigida* PESSAGNO 1977、*Eucyrtidiellum* cf. *circumperforatum* CHIARI et al. 2002、*Eucyrtidiellum* cf. *unumaense* (YAO 1979)、*Hsuum maxwelli* PESSAGNO 1977、*Stichocapsa* cf. *convexa* YAO 1979、*Stichocapsa japonica* YAO 1979、*Striatojaponocapsa synconexa* O'DOGHERTY et al. 2006、*Triversus hungaricus* (KOZUR 1985)、*Unuma gordus* HULL 1997。

以上のように、松ヶ崎丘陵の岩石の堆積年代は中生代の三畳紀～ジュラ紀であることが明らかにされた。それらはかつてのパンタラッサ海の深海底に堆積したものが、海洋プレートの動きに伴いユーラシア大陸縁辺沈み込み帯で付加され、今日の場所へともたらされたものである。沈み込み帯で地層は断層などによって再配列され、混在化していく。その際にチャートと砂岩・泥岩が近接して再配列した。その配列は松ヶ崎丘陵において、チャートがほとんどを占め、南縁部に砂岩・泥岩が分布する形をとった。チャートは石英を主体とする岩石であり、硬質で風化に対する抵抗力が大きい。それに比べて砂岩や泥岩は比較的軟質であり、風化、削剥が進みやすい。長い年月をかけてチャートの南の砂岩・泥岩が選択的に風化・削剥されていくことで、チャートのみが丘陵として残り、急な斜面を松ヶ崎に形成することとなった。

このように非常に長い時間をかけて形成された丘陵地形が、今日の京都の伝統的仏教行事「松ヶ崎妙法送り火」の舞台となっており、これからも松ヶ崎の人々の信仰を下支えしていくであろう。



松ヶ崎丘陵から発見された放散虫化石の電子顕微鏡写真（京都大学大学院人間・環境学研究科自然環境動態論講座の電子顕微鏡、キーエンス製VE-8800を使用して撮影）。a. 三畳紀中世放散虫 *Triassocampe coronata* BRAGIN 1991、b. ジュラ紀中世放散虫 *Striatojaponocapsa synconexa* O'DOGHERTY et al. 2006、c. ジュラ紀中世放散虫 *Stichocapsa japonica* YAO 1979。

個人研究

ダイエット行動の「三日坊主」に対する予防・教育的プログラムの実証的研究

研究代表者・准教授　田中 久美子
（社会心理学・教育心理学）

本研究は、青年期女子の間に広がるダイエット行動を日常生活との関連で捉え、ダイエットの継続的実践により、自らの身体や健康への意識改善、健康行動の継続的能力向上を図る、集団型介入プログラムの開発に先立つ基礎的研究をなすものである。そのために、ダイエットの継続性を主なテーマとして、女子大学生50名程度を対象に、大学入学以降に行ったダイエットについて半構造化面接による個別の聞き取り調査を行う予定であった。しかし、校務繁忙等で個別調査に充てる時間を確保できず、研究方法を見直す必要が出てきた。この点については見通しの甘さを反省するとともに、この経験を今後の研究計画に生かしたいと考えている。

研究方法の再考に当たり、データ収集を集団での質問紙調査に切り替えたため、対象者が男女込みとなることから、女子に多いダイエット行動に限定せず、日常の多様な体験を扱うことが得策と思われた。その上で、当初の研究計画に立ち返り、行動を起こそうとする意図、行動の開始、維持といった行動変容における一連のプロセスで、実施を意図しながらも、その行動開始が停滞する“先延ばし”と、開始したが維持できなかった“挫折”とに失敗状態を分けて、遂行上支障となる内的・外的要因を特定することにした。さらに、その諸要因が、失敗後の対処行動をどのように規定するかについても検討した。

方法

2010年11月～2011年１月に、近畿圏内の国立大学１校及び私立大学３校の学生計421名（男子297名、女子124名）を対象として、心理学関連の講義時間に質問紙調査を実施した。年齢は18～26歳で、平均20.97歳（*SD*＝1.46）であった。また、質問紙の構成は以下のとおりである。

認知的完結欲求尺度　鈴木・桜井（2003）による本尺度は、“決断性（８項目）”“秩序に対する選好（７項目）”“予測可能性に対する選好（５項目）”の３因子計20項目から構成される。各項目について、“全くあてはまらな

い”（1点）から“非常にあてはまる”（6点）までの6件法で回答を求めた。

楽観性尺度　坂本・田中（2002）による改訂版楽観性尺度の10項目について5件法で回答を求めた。

失敗課題に関する質問　実施を意図した内容を便宜上“課題”と呼び、やらなければと思いながらも実現せずに終わった（以下、“失敗”とする）最近の課題を1つ想起し、記述するよう求めた。そして、「実行の開始を引き延ばし、やらずじまいだった（先延ばし）」と「いったん開始したものの、目標達成までは続かなかった（挫折）」のいずれかを選択させた。

主観的課題失敗尺度　項目作成のため、予備調査で別の52名の学生に、課題内容とその失敗状態（先延ばし・挫折）を記入の上、それに関する心理的要因や行動について自由記述を求めた。その結果、小浜（2010）の“計画性のなさ（6項目）”“状況の楽観視（6項目）”“後悔・自己嫌悪（5項目）”の各因子に相当する内容の他に、“予期せぬ用事で課題に取り組む時間がなくなった”等の“不測事態の影響（4項目）”に関する回答を得て、これら計21項目について5件法で尋ねた。

失敗後の対処　失敗した課題に再び取り組む際の、再開意欲（“やり方を工夫すれば、今度はうまく出来ると思う”等）と失敗恐怖（“どうせまた、以前のように失敗すると思う”等）に関する各3項目を独自に作成し、同様に5件法で尋ねた。

結果・考察

主観的課題失敗尺度　因子分析（最尤法、プロマックス回転）の結果、本尺度は“計画性のなさ（5項目）”“状況の楽観視（4項目）”“後悔・自己嫌悪（3項目）”“不測事態の影響（3項目）”の4因子構造であることを確認した。

失敗課題に基づく調査対象者の分類と各群の特徴　失敗課題を“就職対策”“健康管理（ダイエット行動を含む）”“学業”の3種類に分けた。失敗状態別の人数の内訳は、就職対策が計136名（先延ばし69名、継続困難67名）、健康管理が計129名（同42名、87名）、学業が計93名（同56名、37名）であった。なお、他の課題（家事、趣味、恋愛等）を挙げた者は、人数が少なく以後の分析から除外した。x^2検定の結果、学業で先延ばしが多く、健康管理で継続困難が多いことが明らかとなった。実施を意図したのに実現し得なかった行動を日常の多様な体験から自由に想起させた中に健康行動が3分の1程度含まれ、健康を志向しながらも実践し続ける困難さが窺えた。そして、他の行動変容との比較により、健康行動の“継続性”に焦点を当てて検討する重要性を再認識できたのは意義がある。

現時点では、先延ばし群のみ分析を終えているので、以下にその結果を示す。就職対策及び健康管理では、状況を楽観視しないことが、先延ばし後の再試行の可能性を高める。就職対策では望ましい結果を予期すること、健康管理では不測の事態のために先延ばしをしたと外的要因に帰属することも有効である。その一方で、学業は、他の課題に比べ、テストやレポート等により学生自身の価値を直接的に判定される重要な課題であるため、評価懸念から取り掛かりに慎重となり、失敗への脅威も高まりやすく、再起がためらわれるようである。

なお、本研究の一部を日本心理学会第75回大会（2011年9月）にて発表した。

個人研究

日本で発見されたオリヤー語『マハーバーラタ』の研究

研究代表者・講師　ダシュ ショバ ラニ
（仏教学）

既述の15世紀半ばに活躍した有名な詩人サーララーダーサによって書かれた221葉（両面記載）からなるオリヤー語の『マハーバーラタ』（Sāraḷā Mahābhārata）の貝葉写本が日本の愛媛県津島町に存在する。同貝葉写本は江戸時代中期（18世紀）ごろに伝来したものと思われる。現在、それは「津島貝葉」と名づけられ、宇和島市教育委員会津島支所教育課が市指定文化財として管理している。中世オリヤー文字（カラニー書体）を使用した中世オリヤー語で記されており、その書写年代は17世紀初頭と考えられる。内容は叙事詩『マハーバーラタ』の「森林章」の第1部に相当するものである。

日本における『マハーバーラタ』の研究は、その殆どがサンスクリット語テキストに基づいているものである。インドには、『マハーバーラタ』がサンスクリット語だけでなく、様々な地方言語でも書かれている。これらの全てはサンスクリット語で書かれた『マハーバーラタ』からの翻訳ではなく、それぞれの地方で発展し、地方独自の色に染められた文献である。「津島貝葉」もサンスクリット語『マハーバーラタ』の翻訳ではなく、オリッサ地方独自の『マハーバーラタ』になっており、また、同地方は独自の貝葉写本文化を有している。

津島町は愛媛県の南に位置する町であったが、2005年8月1日に近隣の三間町と共に宇和島市に合併された。残念なことに市町村の合併にともなう管轄部門の諸事情により、「津島貝葉」の研究は殆どなされていなく、その存在も全く知られていない。

管見の及ぶ限り「津島貝葉」は、日本に存在する唯一のオリヤー文字で記されたオリヤー語の貝葉写本である。筆者は2008年度～2010年度まで科学研究費補助金を受け、「日本で発見されたオリヤー語『マハーバーラタ』の研究」（基盤研究C、課題番号20520048）という研究課題で、「津島貝葉」のデジタル画像化及び校訂ノート付きのローマ字転写テキストの作成を行なった。さらに、2011年度～2014年度までの科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）を受け、「日本で発見されたオリヤー語『マハーバーラタ』「津島貝葉」の校訂テキスト作成」（基盤研究C、課題番号23520072）という研究課題で今までの研究を継続することになっている。今回の研究は、「津島貝葉」の5つの異本を様々な所蔵機関から入手し、「津島貝葉」を底本としたオリヤー語版『マハーバーラタ』の「森林章・第一部」の校訂テキスト作成を目的とする。

本研究は、研究代表者であるDASH Shobha Rani（大谷大学）を中心に、連携研究者として吉元信行（大谷大学名誉教授）〈2008年度のみ〉、研究協力者として森田浩二（宇和島市教育委員会津島支所教育課担当係長）、杉本浄（東海大学非常勤講師）、海外研究協力者としてDr. DASH Subash Chandra（Senior Lecturer, Utkal University, Orissa）, Dr. DASH Anirban（Lecturer, Central University of Tibetan Studies, Varanasi）, Dr. M. Maithrimurthi（Lecturer, University of Heidelberg, Heidelberg）の協力のもとに進めた。

現在、オリヤー語『マハーバーラタ』には、オリッサ地方に存在するいくつかの貝葉写本の異本に基づき、二つのテキストが出版されている。その内、本研究の対象となる「津島貝葉」に記されている「森林章」と同内容が書かれているテキストは、Mahābhārata: Bana Parba, Dharma Grantha Store, Cuttack 1999-2000（以下「DGS版」と略す）とSāraḷā Mahābhārata: Bana Parba, edited by Dr. Arttaballabha Mohanty, the Department of Culture, Government of Orissa, Bhubaneswar, 1966（以下「SA版」と略す）とである。本研究では「津島貝葉」の内容を、これらのテキストを参考にしながら、その全体の物語の構成の解明を試みた。

その結果、「森林章」の中に説かれている物語ごとに題名を付すことが可能となり、同貝葉写本における「森林章」の組み立てを明らかにした。具体的には、「津島貝葉」の解読を遂行するには、関連文献の整理・読解が必要不可欠である。そのため、これら関連諸文献の整理・読解を基礎作業と位置付け、その上で「津島貝葉」の解読を行なった。

これらの作業を通じて、以下のような成果を得た。

(1)「津島貝葉」の読解作業の効率化を図るため、1a～221b葉（両面記載で442葉）までをデジタル画像化した。

(2)解読困難なカラニー（karaṇī）書体で刻まれた当該写本の内容を利用しやすい形にし、広く研究者に利用してもらうため、デジタル画像化した部分について、そのローマ字転写テキスト（diplomatic edition）を作成した。

(3)ローマ字転写したテキストを、上記に述べたオリッサで既に活字出版されている2冊のオリヤー語版『マハーバーラタ』であるDGS版及びSA版と比較・検討し、その校訂ノートを作成した。

(4)当該写本の作成地であるインド東部・オリッサ州へ行き、研究調査を行った。その結果としてオリッサ州立博物館、国立資料館東支所および個人が所蔵するものなどに、「津島貝葉」と同系統（つまり同一の著者であり、同一部分で言語と書体、内容が同じ）の貝葉写本が4本存在していることが確認できた。さらに、ドイツのチュービンゲン大学図書館にも同系統の一本の貝葉写本があることが確認できている。これらの異本を用い、今後「津島貝葉」の校訂テキストの作成に専念する予定である。

個人研究

チベット仏教における論理学の研究

タルマリンチェン著
『量評釈の釈論・解脱道作明』
第3章「現量」の翻訳と研究について

研究代表者・名誉教授　白館 戒雲
（仏教学）

2011年2月に筆者は、ダルマキールティの主著『量評釈』とそれに対するタルマリンチェンの註釈『量評釈の釈論　解脱道作明』のうち第3章「現量（直接知覚）の章」を全訳研究し、『チベット仏教　論理学・認識論の研究Ⅱ』（人間文化研究機構　総合地球環境学研究所研究プロジェクト「人の生老病死と高地環境―「高地

文明」における医学生理・生態・文化的適応」2010年度研究報告書）として発表した。これは、前年度の第2章「量成立章」の全訳研究の続きである。

インド大乗仏教の論理学者ディグナーガ（陳那、480−540年頃）は主著『集量論』の冒頭に、仏こそがその智恵と慈悲の実践を通じて解脱の希求者にとって「量」（基準）であると述べた後、その「量」は現量（知覚）と比量（推理）の二つであり、各々、自相（独自相）と共相（一般相）を対象とすること、聖典の権威も現量と比量の二つに他ならないことを述べた。ダルマキールティ（法称、600−660年頃）はその註釈として『量評釈』を著したが、この第3章「現量」にはその認識論が広説されている。すなわち、量の数、現量の内容、その対象は自相であること、量果は量であり、自証知であること、そして外境を否定した唯識派と外境の実在を説く経量部の認識論である。これは、先のアビダルマや唯識の所説を承け、後に認識論の基準として中観・唯識の議論を発展させた最重要の典籍である。インドでも多くの註釈文献があり、チベットでも幾つもの註釈が著されている。ゲルク派の開祖ツォンカパ・ロサンタクパも弟子たちに講義しているが、最も重視されるのは、その遺志を承けた法嗣タルマリンチェンによる『解脱道作明 *Thar lam gsal byed*』である。

『解脱道作明』の講釈・聴聞は代々の学僧たちにより継承され、幾つか復註が著されたが、チベットでは中国政府による禁圧政策もあって伝統が途絶え、インドでも最高水準の学道を伝える人は乏しくなった。筆者は若い時、亡命先でこの伝統を、当時最高の学僧であったニマ・ギェルツェン先生とハキャップ先生に学んだ。筆者は1974年の来日以降も心がけてきたが、良い機会を得られなかった。この第3章は戸崎宏正先生がインドの註釈文献に基づきすぐれた翻訳を著されたが、今回、藤仲孝司氏の協力もあって第2章に次いで2006年以来翻訳研究を進め、その一部分は『成田山仏教研究所紀要』に発表した。今回全体を見直し、完成できたが、『解脱道作明』第3章に関して世界初の現代語訳と研究である。方法としては、デーヴェンドラブッディ、プラジュニャーカラグプタなどインドの註釈文献に加えて、チベットの註釈文献として、『解脱道作明』と異なった立場であるケードゥプ・ジェの『釈論正理海』を参照した。『解脱道作明』の釈が本頌を離れている個所では、逐語釈的なゲンドゥンドゥッパ（ダライラマ1世）の註釈を参照した。内容の詳しい分析に関してはパンチェン・ソナムタクパ、タナクパの著作を参照した。いずれもこの分野で重要視される典籍である。また、最近の研究成果を参照して、『量決択』の偈頌との関係などにも言及した。

参考資料として、ツォンカパの講義録とされる二つの著作、ツォンカパ述ケードゥプ作『現量章の註釈 *mNgon sum le'u'i ṭīkka rJe'i gsung bzhin mKhas grub chos rjes mdzad pa*』（ラサ版Toh.No.5410 Ma）、およびツォンカパ述ギャルツァプ作『現量章の備忘録rGyal tshab chos rjes rJe'i drung du gsan pa'i mNgon sum le'u'i brjed byang』（ラサ版Toh.No.5404 Ba）をあわせて全訳研究した。これらは第3章の初めの部分のみについてである。前者はツォンカパの晩年の著作を参照し、ケードゥプ・ジェの他の著作に言及しており、ケードゥプ・ジェ自身の考え方が反映されている。後者は、デーヴェンドラブッディの関係個所に多く言及している。v.82 から証因に関する議論では、いずれも『量決択ダルモッタラ註』とゴク翻訳師などの議論に論及している。

時間的な制約もあったが、以上のような文献の読解を通じて『解脱道作明』の翻訳自体は一定の水準を確保できたと思う。真宗総合研究所の関係者、成田山仏教研究所の関係者に感謝の意を表したい。

この研究は、平成22（2010）年度科学研究費補助金、基盤研究（C）「チベット仏教における論理学の研究」による研究成果の一部でもある。

個人研究

高次脳機能障害者とその家族のピアサポートによる自己と関係の変容に関する発達的研究

研究代表者・教授　脇中　洋
（発達心理学・法心理学）

本研究は、高次脳機能障害者とその家族に特化したピアサポート実践を通じて、当事者の自己変容や家族関係の変容をモデル化し、彼らの回復過程を検証するとともに、高次脳機能障害者の新しい回復理論の構築をめざすものである。

脳損傷の結果引き起こされる高次脳機能障害は、病院でのリハビリを終えて以降も人格変容や病識の欠如によって家族との葛藤が絶えず、就労を果たしても対人関係につまずくことで問題行動を引き起こしたり無気力に陥ったりするなど、社会適応に困難を抱えてい

る（厚労省2003）。この障害は人格変容をきたすため、新たな自己に気づき認めることが回復につながるとされながら、医療的リハビリテーションの場ではそれが果たせていないことを示している。

これに対して我々は、ピアサポートが自己を再構築する社会的な場として機能することに着目し、2005年度からの萌芽研究（課題番号17653076）では、先進的に取り組んでいるカナダの当事者団体と連携しながら国内で初めて高次脳機能障害者向けの体系的ピアサポーター養成プログラムを作成し実際の当事者ピアサポーター６人と家族ピアサポーター10人を養成した。その後彼らとともにプログラムの修正を図るためピアサポート委員会を結成し、カナダの当事者団体とも連携を深めながら実践の準備を進めてきた。2008年度には福祉医療機構から１年間の事業助成を得て、当事者とその家族向けにピアサポート事業所を開設、彼らの回復に向けた支援活動を継続することで、本研究の活動基盤を確立している。

ピアサポート実践によって、当事者の自己認識や当事者間の関係が顕著に変容し、生活行動にも大きな変化をもたらすことが確認できた。逆に障害受容と社会的適応のよいと思われたメンバーが自己覚知に乏しいことを露呈した。これはリハビリの求める社会適応方略の内面化が自己適応の放棄を生み、自他の抑圧をもたらすこと（津田1997）を示唆するものである。

当事者たちがピアサポーター養成から実践の過程で著しい回復を見せた要因として、ピアサポートという役割を得て他者から必要とされ新しい自己を承認できること、サポートを受ける側には同障者が多様で抑圧的でない役割モデルとして機能すること、閉じた個体機能の改善ではなく対等な関係の中で持てる力の発現に着目することによって当事者の自発性が引き出されることがわかってきた。

また我々は、人格の変わってしまった当事者の身近にいてそれを受け入れざるを得ない立場にある家族を含んだ実践活動を重ねる中で、当事者は「家族や他者との関係の中でこそ新たな機能を形成していく」という関係発達論的観点が欠かせないこともわかってきた。

翻って医療の場では要素還元的に症状を捉えており、これはピアサポート実践から仮説として提示できる回復の機序とは異なるものである。彼らの回復の機序とは、「対象化され、閉じられた個体機能の修復」ではなく、「関係の場における主体的な自己の再構築」というすぐれて関係発達論的問題なのである。本研究は、ピアサポート実践を継続させながら、症候学的観点ではなく関係発達論的観点から、高次脳機能障害者の回復過程（主体性を引き出すことによる症状の変容過程）を検証することによって、医療や福祉行政に対して新たな発達的回復モデルの提供を図ろうとするものである。

2010年度は以下４項目の研究実績を残した。

(1)ピアサポート実践活動

NPO法人大阪脳損傷者サポートセンターと連携しながら概ね週１回以上のピアサポート実践「ピアサポ・デイ」と月例ピアサポーター委員会「ピアサポートin大谷」を実施して記録に残し、自己と関係の変容を示す事例の収集に努めた。この中には当事者が資金を徴収管理してメニュー決めからランチ制作までを担う「ランチの会」、習字や楽器演奏も含まれる。

また滋賀県高島市今津町椋川に借り上げた２アールほどの田「ピアサポ田んぼ」で田植えから稲刈りまですべて手作業による稲作もこなした（収穫した稲は「ランチの会」で活用）。

こうした実践的活動を当事者同士が活動をともにすることによって、個々の課題があらわになる一方で、新たな可能性にも気づき、自己認識を深めて行った。

(2)第Ⅲ期ピアサポーター養成とプログラム練成

ピアサポート実践に欠かせないピアサポーター４名を養成するために、2010年７月から11月にかけて計14回のセッションを重ね、ピアサポーター養成プログラムをさらに練成した。

なおこれまで中心的立場にあったピアサポーターたちは、平均して数カ月から１年余りの活動の後、それぞれに就労先を見出したり社会的活動の場を得ていった。

(3)現場専門家を対象とした研究会の開催とまとめ

生活施設やハローワークなどの就労支援施設にて高次脳機能障害者と向き合う現場専門家を対象とした事例検討研究会を４回開催し、当事者や家族からの声に直接耳を傾けてもらい、双方の問題を学び合った。その内容は「高次脳機能障がい者地域生活サポート研究会2009年度報告集」（本文46ｐ）にまとめた。

現場専門家同士が地域的なネットワークを構築すると同時に、この場に参加した当事者が、現場専門家の紹介を受けて社会的活動の場を得て行った例もあった。

(4)カナダのピアサポーター専門家と学術交流および学会発表に向けて打ち合わせ

これまで交流を進めてきたVBIS（Victoria Brain Injury Society）のスタッフを８月から９月にかけて日本に招聘し、事例情報を交換したり、ピアサポーター養成に加わってもらったりした。また沖縄県の小学校におけるピアサポートを参観するなどして日本の学校ピアサポートとカナダの高次脳機能障害ピアサポートの比較

を試みた。さらに次年度カナダで共同の学会発表をする準備も行なった。

[文献]
赤松　昭　2007「「脳損傷」という出来事への家族の主観的認識とその精神健康ストレスとの関連」『医療社会福祉学研究』13/14/15合併号 pp.11-21.
安積遊歩　1999『ピア・カウンセリングという戦略』青英舎
厚生労働省　2003 高次脳機能障害支援モデル事業中間報告書 http://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/04/h0410-1.html
脇中洋，中塚圭子　2006「高次脳機能障害者がピアサポートシステムにおいて自己を再形成するプロセス―徹底した当事者主義は何をもたらすのか」日本発達心理学会第17回大会発表論文集647.
中塚圭子，脇中洋　2008「高次脳機能障害者のピアサポートに関する実践的研究」日本発達心理学会第19回大会発表論文集659.
津田英二　1997「自己決定を支える学習集団に関する理論的考察」日本社会教育学会紀要33. pp.75-84.

個人研究

ルネサンス詩における アレゴリーの変容 ―ロンサールからキリアンへ―

研究代表者・本学非常勤講師　林　千宏

本研究の目的は、ルネサンス期の詩的言語、特にアレゴリーの変容を明らかにするものである。とりわけ16世紀末期におけるカトリックの叙事詩人ミシェル・キリアン（Michel Quillian : ? – 1614）に注目し、ルネサンス期の詩的言語の中心を占めたアレゴリーが、ロンサール以降17世紀の古典主義詩法が開花するまでに、時代とともにどのように変容していくかを検証し明らかにすることを目的とする。具体的にはキリアンの作品『黙示週』（*La Derniere Semaine*）に注目し、分析を行う。この作品は世界が終末を迎える一週間をうたった叙事詩で、全体は詩人が夢に見た映像であるという構造を備えているが、分析するにあたって、叙事詩に不可欠な描写技法たるエクフラシスに着目し、アレゴリー表現の持つ視覚性との関わり、またエクフラシスがもたらす構造上の重層性を手がかりとした。

このテーマのもと平成22年度に行った研究はこの詩人の伝記的調査、また『黙示週』における宗教改革・反宗教改革あるいは政治の影響の検討である。まず詩人の伝記的調査について、フランス国立図書館、ナント市立図書館、レンヌ市立図書館の調査を行ったが、キリアンに関する新資料は発見されなかった。しかし、これらの図書館にて17世紀以降に出版された書誌を包括的に検討、アンリ四世周辺の法官貴族の異動を調査し、アンリ四世の国王秘書官Michel Quilienが浮かび上がったが、彼が『黙示週』の作者であると同定するにはなお決定的な証拠を欠くと結論づけざるを得なかった。

さらに『黙示週』に対する宗教改革・反宗教改革あるいは政治の影響についても考察を行った。この作品に見られる宗教また当時の政治状況の影響について考察する必要があるのは、世界の終末という宗教的主題を扱った『黙示週』が同時代の宗教戦争とは無関係では創作され得なかったという事実による。パリ大学神学部というカトリックの検閲を受け出版許可を得ながらも、この作品は当時のフランス王アンリ四世に捧げられており、さらにこの王は言うまでもなくプロテスタントから二度のカトリックへの改宗を経てフランス王となった人物である。この複雑さはそのまま『黙示週』という作品の立場の複雑さも示していよう。キリアン自身もそもそもはカトリック陣営の首領として神聖同盟を率いるアンリ・ド・ギーズへの頌歌を発表していた過去がある。この問題を考えるに際して注目したのが『黙示週』「一日目」に見られる「信仰」そして「理性」の在り方である。

そもそもなぜ「理性」なのか。それは彼が自らの詩人観を最もよく表している『黙示週』「五日目」でキーワードとして用いるのがこの「理性」だからである。「五日目」で主に描かれるのは反キリストである。反キリストとは終末に際して現れる偽りの預言者を意味するが、ロンサールらユマニスト詩人達はネオ・プラトニスム哲学に則り自らを神に選ばれた預言者であるとしていた。この哲学にも当然通じていたであろうキリアンが反キリストというモチーフを扱うとき、そこには彼の詩人観も垣間見られるのではないかと考えた。加えて世界の終末という『黙示週』の主題自体が預言者によるものであることも指摘しておきたい。このテクストを検討すると、キリアンは反キリストという同時代的なモチーフを正統的カトリック信仰に反する、「理性を失わせる者」として描き、一方で自らの作品の構成、あるいは反キリストの表象そのものにおいて理性

的たることを前面に押し出している。こうした理性の強調は詩人キリアンにとって何を意味するのか。

キリアンがこの点について語るのが「一日目」である。この日は、これから詩人が歌う詩—すなわち世界の終末の情景—が自らの「夢」であったことを示す導入部だが、「夢」の描写が始まるまでの箇所で、世界の終末を歌うことの困難さを歌う。詩人は、その内容が神の司る領域である主題を歌う際には理性によって天に近づこうとすることしかできない。だからこそ「私」たる詩人キリアンは「類似」「根拠」そして「推論」を用いる「理性的」な方法によって天に近づこうとするのだとし、実際に「夢」の描写に至るまでにその詩法を実践してみせる。だが、注意しなくてはならないのは、「一週間」という作品全体の構造が、眠りから覚めた詩人が導入したものであるにも関わらず、それを彼は「一日目」という夢の中に設定していることだ。つまり詩人は、自らが導入した「一週間」という時間構造に彼自身も含まれているのである。すると創作をする主体までもが創作物に含まれてしまうという構造を備えていることになり、詩人が言葉を発している立場そのものが虚構の中へと組み込まれてしまう。こうして詩人が語る言葉の信憑性もが宙づりになってしまい、「理性」による詩法も相対化されてしまうのである。この徹底した懐疑こそキリアンにとって真に理性的な詩法であったのではないか、というのが本研究において導き出された結論である。キリアンは「一日目」でこの方法を徹底して推し進めるが、このように真に理性的な詩人たろうとした点にこそ、宗教対立や王家の変遷に直面した詩人の独自性がみられる。そしてこの理性重視の詩法が前世代の詩法と断絶したものではなく、ロンサール以降のアレゴリー詩法にその出自を持つことを、両者の具体的な詩句の比較によって明らかにしていった。

個人研究

フレデリック・ダグラス晩年のマスキュリニティ言説とアメリカ社会における人種表象

研究代表者・本学非常勤講師　朴　珣英

本研究は、19世紀アメリカで奴隷の身分から黒人解放運動の思想家・作家・活動家となったフレデリック・ダグラス（Frederick Douglass: 1818–95）に関する筆者の文学・文化史的研究を発展させるものである。本研究の目的は、ダグラスの奴隷体験記や小説、回想録、その他の資料にみられる人種およびマスキュリニティに関わる言説に焦点を当て、その特質および19世紀末から20世紀に至る世紀転換期のアメリカ社会の人種表象を明らかにすることである。

フレデリック・ダグラスは奴隷制廃止運動の活動家としての最初期から、当時否定されていた黒人男性のマスキュリニティを強調することが、黒人の解放と社会的地位向上において有効であると考えていた。このことはダグラスの最初の自伝かつ奴隷体験記*Narrative of the Life of Frederick Douglass*（1845）および中編小説"The Heroic Slave"（1853）などを論じた既往の研究からも明らかである。しかし南北戦争終結後、ダグラスはマスキュリニティ言説をもはや戦略的には用いなかったとする見方が一般的である。そこで本研究ではそのような説を詳細に検討し、先行研究では網羅されていない一次資料および二次資料の文献研究にも取り組み、従来僅かしか考察されてこなかったダグラス晩年のマスキュリニティ言説とその意図を明らかにすることを試みる。また、女性解放運動にも積極的に関わったダグラスが、自身のマスキュリニティ言説を状況に応じて変容させた背景にある社会情勢、世紀転換期アメリカ社会における人種表象の特質にも焦点を当てる。

本研究の初年度である2010年度は、フレデリック・ダグラスの未公刊原稿を一次資料として、ダグラス晩年の著述の詳細な整理および検討を試みた。特にサント・ドミンゴ（現ハイチ）の独立指導者トゥサン・ルヴェルチュール（Toussaint L'Ouverture: c. 1743–1803）に対するダグラスの見解、とりわけフランスの上院議員ヴィクトール・シェルシェ（Victor Schoelcher）によるトゥサ

ンのフランス語伝記本*Vie de Toussaint L'Ouverture*（1889）の英語版用の序文としてダグラスが執筆した未公刊の手書き原稿（マイクロフィルム『ダグラス関連資料集』*Frederick Douglass Papers*. 34 microfilms. Washington, DC: Manuscript Division, Library of Congressに収載）を手掛かりに、ダグラスのマスキュリニティ言説と世紀転換期における当時のアメリカ社会の黒人に対する人種表象を考察した。ダグラスの原稿中のレトリックを中心とした分析を行い、そこに見られるダグラスのマスキュリニティ言説および「理想の黒人」像を明らかにした。この成果は大谷大学西洋文学研究会2010年度総会（2010年7月17日）において「フレデリック・ダグラスのトゥサン・ルヴェルチュールに関する未公刊原稿について」とする題目のもと発表を行った。

また、本年度はダグラスと同時代に活躍した白人作家ハーマン・メルヴィル（Herman Melville:1819–91）との比較研究も行った。黒人奴隷の船上蜂起を題材にした中編小説二作品、すなわちダグラスの"The Heroic Slave"（1853）とメルヴィルの"Benito Cereno"（1855）における黒人の表象を、「雄弁」と「沈黙」をキーワードにそれぞれ分析した。その成果は、大谷大学英文学会『英文学会会報』第37号に論文"Silence and Eloquence in Frederick Douglass's 'The Heroic Slave' and Herman Melville's 'Benito Cereno': A Preliminary Study"として掲載された。

以上の成果を踏まえ、2011年度は、シカゴ万博（1893年）におけるアメリカ黒人排除と「黒人の展示」へのダグラスの抗議、および歪んだ人種表象に対する対抗言説として*The Reason Why the Colored American Is Not in the World's Columbian Exposition*（1893）で論じられたダグラスのマスキュリニティ言説の分析、そして実際のダグラスの行動や著作との関わりに焦点を当てた考察を行う予定である。さらには現在のアメリカ合衆国ではバラク・オバマ大統領の誕生により、社会の変容のみならず、「黒人」や「アフリカ系アメリカ人」とは何かについての人種や民族をめぐる議論が新たな形で登場している。そうしたアメリカ研究の時事的な部分との関連も視野に入れ、引き続き研究に取り組んでいく。また、関連学会での発表および論文投稿も行いたいと考えている。

個人研究

貧困に対する活動と社会的レジリエンスの社会学的研究
—シカゴ学派からの展開と実践

研究代表者・任期制講師　西川 知亨
（社会学）

2008年に起こった世界的な金融危機・経済危機は、わが国でも「貧困」を可視化させることとなった。「貧困」が原因で、「健全」な社会生活を送ることが困難になったり、北九州市、桑名市の「餓死」事件に象徴されるように、命を落としたケースも少なくない。貧困による「社会的人間としての存在状態」の危機、あるいは「生命」の危機をいかにして回避していくかは、社会学のみならず日本社会にとって喫緊の課題である。社会諸科学において、「貧困」にともなう諸問題や社会再編に関して幾多の研究が蓄積されている。だが、貧困のために生活解体·社会解体を引き起こす条件、さらには再組織化を促す条件というきわめて社会学的かつ社会的な課題を、時間と空間、質と量などの側面から、総合的に把握しようとした調査研究については、初期シカゴ学派の一連のモノグラフ研究以外には、あまり蓄積がない。そもそも、新しい社会的レジリエンスを提供する可能性が示唆される、近年の反貧困活動の社会学的・学術的研究は、いまだ不十分にしかなされていない状況にある。

本研究の目的は、＜貧困層＞と＜その支援活動の社会的影響＞について、社会学的考察をおこなうことにある。具体的には、貧困の予防／脱却に向けた「新しい福祉」を生む可能性を含んでいる「反貧困」（anti-poverty）活動が、社会的レジリエンスにどのように影響を及ぼしているのかを明らかにする。方法として、研究代表者が社会学的方法論上の意義を見出してきたシカゴ学派の総合的社会認識にもとづく技法を活用する。国家・行政や市場社会とは違う形で社会的レジリエンスを育み、新しい福祉の供給源として注目しうる「対抗的公共圏」としての反貧困／「派遣村」活動、あるいはその他の貧困に対抗する活動の調査を通して、緊急性の高い「貧困」問題の都市・地域社会学的研究を遂行するものである。

本研究では、日本の「貧困」／貧困層とその支援に

関する全国の活動（関西、東海、北陸、関東、東北地方など）、および比較調査のための米国カリフォルニア州のフィールド調査を進めるなかで、貧困に対抗する活動が社会的レジリエンスに及ぼす影響についての考察と論点の整理をおこなった。同時に、これらの調査を理論的・方法論的に裏付ける初期シカゴ学派の「総合的社会認識」の社会学の検討を進め、活用を構想することで、日本における、専門家／「当事者」双方の意欲・意図が交錯した「生態学的」活動の様相について解明することを目指した。初期シカゴ学派の「総合的社会認識」の方法論的含意のなかでも、とくに時間／空間、科学／政策、等の二分法の絡み合わせに焦点を合わせ、フランクフルト学派などの公共圏研究の伝統をも参照するなかで、「居場所の人間生態学」の現代的展開を図った。

それにより、明らかになったのは主に以下の点である。

第１に、支援者／相談者の関係の柔軟性が社会的レジリエンスを高めている可能性である。支援者も相談者の立場に役割転換していく可能性を想定し、相談者も支援する側にまわることで、社会のなかでの自己の位置づけや生態学的居場所を獲得していく過程が明らかとなった。

第２に、世代経験による活動参画の様相である。活動参加者は自分の世代経験をもとに反貧困の活動にかかわる。活動では世代間ギャップを乗り越えようとする共同参画の動きもあるが、ただし、世代経験をもとにした生態学的戦略（団塊の世代以上の年代におけるネットワーキング活動、若年世代における社会的起業を旗印とした活動など）を講じようとする活動も出てくる。

第３に、「対抗的公共圏」としての反貧困活動の展開過程・生態学的自然史である。とくに近年の対抗的公共圏としての反貧困活動は、直近５年間を見てみると、傾向として、１.「公共圏の衰退の問題化」の時期、２.「対抗的公共圏の創出／創発」の時期、３.「対抗的公共圏の諸圏域との協同・ネットワーキング」の時期、４.「対抗的公共圏の目的の多様化／変容」の時期、へと展開していく様子を考察しえた。

本研究を通じて、初期シカゴ学派の社会的再組織化論を批判的に修正・活用し、現代的で柔軟性な組織化の可能性を視野に入れた社会的レジリエンス論への構想を図った。人々の社会的絆は弱体化の様相を呈し、社会的・関係的コントロールが発揮されず、社会のなかでの自分の居場所を求めて漂流する子ども／若者／中年／高齢者の姿が見られる。現代というよりも近代の問題とされた労働／貧困問題は、現代の問題となった。ここにおいて、＜初期シカゴ学派が対象とした貧困問題とそのなかで生み出された理論＞および＜現代日本における貧困状況とそこでの社会学者の仕事＞の緊張関係を認識しながら、両者の関係性が検討・活用されることが求められる。現代日本において、人と社会の福祉を追求する社会的レジリエンスを構築していくための示唆のひとつは、このなかにあると思われる。

個人研究

タイ国中部地域の王室寺院が所蔵する東南アジア撰述仏教説話写本の研究

研究代表者・本学非常勤講師　清水 洋平

現在、東南アジア大陸部で伝承されてきた東南アジア撰述の仏典写本は、一部の寺院の経蔵に無差別に保管されているものが多く、所在やその内容は不詳のものが多い。また、所蔵環境も良くないことから隠滅の危機に瀕しているものが多い。この状態を危惧する研究者並びに研究機関がその調査・収集、或いはカタログの作成に努力している。

このような現状を踏まえての本研究は、タイ国中部地域の王室寺院に所蔵されているクメール文字で記された貝葉写本を中心に、同国に流布する東南アジア撰述の仏教説話写本の研究を行う。既に知己を得たタイ国の研究者や僧侶と協力して、同地域の王室寺院が所蔵する収蔵文献の特色を明らかにし、また、個々の写本研究を遂行する。特に、本研究活動の中から、今後の仏教説話写本研究の基礎となる東南アジア撰述仏典写本のデータベース構築を第一義の目的とする。

本研究は、従前の科学研究費補助金プロジェクト「『パンニャーサ・ジャータカ』を中心とする東南アジア撰述仏教説話写本の研究」（特別研究員奨励費19・8876）を承けているため、先ず、そこで収集した約1700套（１套の中に複数の文献が所収されることが多い）を超える貝葉写本集成の文献情報と約４万枚近くのデジタル画像をもとに、東南アジア撰述の仏典写本に着目し、タイ国中部地域の王室寺院が所蔵する収蔵文献の所在目録・データベースを完成させる。次に、仏教説話文献をより深く探究する手段として、その鍵となる'Ānisaṃsa'と呼ばれる一群の積徳行に関わる釈義文献の基礎的な

文献研究を行うという2つのアプローチを取る。

本年度は、先ず、タイ国中部地域に所在する王室寺院が所蔵する現在収集済みの約1700套の文献情報、並びに東南アジア撰述の仏教説話に関わる文献を中心とした約4万枚近くのデジタル画像について、その所在目録・データベースを構築するため、東南アジアの仏典写本研究に長年尽力されてきた研究者であるJacqueline Filliozat（Honorary lecturer, École Française d'Extrême-Orient）女史を招聘し、8月30日より2週間、同女史の全面的な協力を得て、それらの所在目録・データベース構築に向けての基本方針を策定した。尚、ここでいう所在目録・データベースとは、以下の寺院が所蔵する収蔵文献を軸にしたものである。

○Wat Mahathat Yuwaratrangsarit（ワット・マハートトユワラートランサリット）：アユタヤー王朝期（1351～1767）創建の名刹で、タイ国の上座仏教の多数派であるマハーニカーイ派の総本山。1788年にラーマ1世（在位1782～1809）の命により結集が行われた場所である。結集に伴い、各地から多くの貝葉写本が集められ、新たに整備、収蔵されたため、王室寺院が所蔵する収蔵文献の全体像としての基本形を知る上でも重要である。第1級王室寺院。収蔵貝葉写本は約700套。

○Wat Ratchasittharam（ワット・ラーチャシッタラーム）：ラーマ1世によって復興された古刹で、アユタヤー王朝の最後のサンガ・ラージャが招聘された歴史をもち、歴代の王が仏教徒としての修行と瞑想を学んだ由緒ある寺院である。また、タイ国中部地域の寺院の中でも、手付かずのまま残されている貝葉写本の所蔵量が最大級であり、復興されて以来、一度も写本についての整備がなされていないため、伝統的なパーリ聖典以外の蔵外文献、東南アジア撰述文献がそのまま多く残されており重要である。第2級王室寺院。収蔵貝葉写本は約720套。

○Wat Yai Suwannaram（ワット・ヤイスワンナーラーム）：アユタヤー王朝第32代、サンペット8世（在位1703～1709）の治世に復興された歴史をもつ古刹。アユタヤー時代におけるビルマ軍の徹底した破壊を免れた数少ない寺院であり、ラーマ5世（在位1868～1910）の治世に大規模な修繕が行われ、貝葉写本の所蔵環境も整えられた。従って、タイ国中部地域における現存写本の多くはラタナーコーシン時代（1782～）のものであるが、それ以前の希少なアユタヤー時代の写本の多くが残存している可能性が高く重要である。第3級王室寺院。収蔵貝葉写本は約240套。

次に、アユタヤー王朝期創建の名刹であり、ラーマ2世の菩提寺であり日本人にも馴染みの深い、バンコック所在の第1級王室寺院Wat Arunratchawararam（ワット・アルンラーチャワラーラーム：通称Wat Arun）の所蔵写本の調査許可を得ていたため、2011年2月7日～2月28日に現地調査を実施した（但し、2月7日～18日までは大谷大学真宗総合研究所の業務を行った）。同寺院に収蔵されていた約160套の貝葉写本集成の中には、タイ国内で現存している貝葉写本としては古いアユタヤー時代後期（1600年代）に筆写された貝葉写本や*Paññāsa-jātaka*、*Paṭhamasambodhi*のnissaya、*Maṇī-Padīpa*、'Mahābuddhaguṇa'や'Ānisaṃsa'に関する文献など、稀覯文献と考えられるものも多数所蔵されており、それらをデジタル画像資料として収集できたことは大きな成果であった。これにより、現在進行中の所在目録・データベース構築作業に貴重な文献情報が加わることになり、そのより高い完成が見込まれる。

尚、本年度は、現在収集済みである上記のWat Yai Suwannaramが所蔵する貝葉写本集成の文献情報について、2010年9月10日に立正大学で開催された日本印度学仏教学会第61回学術大会において研究発表を行うと共に、発表内容を『印度学仏教学研究』第59巻1号に執筆した。また、北タイ（ラーンナー王国）で作られた東南アジア独自の仏教説話*Paṭhamamūlamūlī*についても、その翻訳研究を『真宗総合研究所研究紀要』第28号に掲載した。

海外学会参加報告①

「第7回 国際ルードルフ・オットー・シンポジオン」に参加して

海外特別派遣者・准教授　村山 保史

2011年5月12日から14日にかけてドイツのマールブルク大学（Philipps-Universität Marburg）でおこなわれた「第7回国際ルードルフ・オットー・シンポジオン」（"VII. Internationales Rudolf-Otto-Symposion"）に参加する機会を得た。

これまでも大谷大学から国際仏教研究班メンバーが中心となって参加してきたこのシンポジウムの今回のメインテーマは「性の公正:諸宗教の挑戦」（"Geschlechtergerechtigkeit: Herausforderung der Religionen"）であり、諸宗教の聖典において、また今日の宗教組織において性の公正はどのようなものとして認識され、いかに確保されているのかという問題について議論がなされた。三日間を通じての（博物館ツアー等を除いての）会場は大講堂アルテ・アウラであった。

シンポジウムは12日の夕刻、マールブルク大学福音主義神学部部長のショイフェレ教授（Wolf-Friedrich Schäufele）による開会宣言とともにはじまった。その後、同日夜にかけて、四つの基調講演（"Feministische Perspektiven auf Gesclechtergerechtigkeit als Herausforderung an und in Religionen〔フェミニズムの観点から見た諸宗教への、そして諸宗教における挑戦としての性の公正〕"、"Aspekte der Geschlechtergerechtigkeit im Hinblick auf den Status der jüdischen Frau früher und heute〔昨今のユダヤ人女性の地位という観点から見た性の公正〕"、"Gesclechtergerechtigkeit –Herausforderung für die Religionen und den Staat〔性の公正――諸宗教と国家に対する挑戦〕"、"Gesclechtergerechtigkeit in den Religionen. Systematisch-religionswissenschftliche Eröffnung des Themas〔諸宗教における性の公正。シンポジウムテーマの体系的―宗教学的な解明〕"）がなされ、キリスト教やユダヤ教、宗教学といった立場からの「性の公正」についての、問題の全域にわたる総論的な見通しが述べられた。

翌日、13日午前からの講演は以下の四つの小テーマの下になされた。(1)聖典と伝統（Schrift und Tradition）、(2)性モラルと家族（Sexualmoral und Familie）、(3)宗教奉仕と職務（Dienste und Ämter）、(4)超越のイメージ（Transzendenzvorstellungen）である。講演では、それぞれの宗教や宗教学の立場から、さまざまな時代や地域をフィールドとして「性の公正」について各論としての報告がなされた。筆者は(4)の小テーマに属するものとして、14日午前に"Genderimplikationen in Symbolisierungen des Göttlichen in buddhistischen Traditionen in Ostasien"（「東アジアの仏教的伝統における神的なものの象徴化に示唆されるジェンダー」）と題した講演をおこなった。親鸞を中心とした浄土思想に見られるジェンダー意識について考察したものである。東アジアからの報告者は筆者ひとりであった。

14日の午後にはシンポジウムを総括する講演がなされ、引き続き、シンポジウムの統括責任を担ったエルザス教授（Christoph Elsas）より閉会の挨拶があった。ここで氏はしばしば大乗仏教や親鸞の思想に言及され、それはマールブルク側の親鸞への関心の高さをうかがわせるものであった。とはいえ、かつて大谷大学との共同研究を推進する役割を担ったマールブルクの研究者（Hans-Martin Barth、Gerhard Marcel Martin、Michael Pyeの各氏ら）はすでに大学の職を退いており、また――どちらかといえば現代的な志向をもつテーマからの影響も多分にあろうが――新世代による今回のシンポジウムにはそれまでのシンポジウムとはやや異なった雰囲気も感じられた。今後、どのようなかたちでマールブルク大学との共同研究を継続していくのか、検討すべき時期を迎えているといえよう。

エリーザベト教会を望む

海外学会参加報告②

第13回ヨーロッパ日本研究協会（EAJS）学術大会に参加して

国際仏教研究　研究代表者・教授　ロバート F. ローズ

８月19日から29日まで、国際仏教研究班庶務の井上尚実准教授・同研究班嘱託研究員のマイケル・コンウェイ非常勤講師と共に、バルト３国の一つであるエストニアの首都タリンで開催されたヨーロッパ日本研究協会(European Association for Japanese Studies、EAJSと略す)の第13回国際会議に参加し、研究発表を行った。またこの学会の前後には、ドイツのライプツィヒ大学・ベルリン自由大学とデンマークのコペンハーゲン市内を訪問し、現地での仏教研究の動向や宗教事情について情報収集する機会を得た。以下、簡単に今回の訪問について報告する。

１．第13回ヨーロッパ日本研究協会国際会議について

ヨーロッパ日本研究協会は、ヨーロッパにおける日本研究を促進するために1973年に組織され、それ以降、３年おきにヨーロッパ各地で学術大会を開催してきた。この学会はヨーロッパ全土のみならず、日本や北米より多くの学者が集まり、国際的な日本研究の重要なハブのひとつとなっている。今回の学術大会は９月24日から27日の４日間の日程で開催されたが、10の部会が設けられ、日本の政治・経済から、歴史・文学・美術・芸能・思想・宗教・日本語教育にいたるまで、幅広く研究発表が行われた。今回は過去最多の700人の参加者があったと聞いている。10部会のなかには第８部会として宗教・思想部会（Religion and History of Ideas Section）が設けられており、国際仏教研究班では、この部会で「日本浄土教における宗教的癒し―源信・親鸞の思想における苦の克服」というパネルを開催し、発表を行った。本研究班では、2005年にウイーンで開催された第11回大会と2008年にイタリアのレッチェで開催された第12回大会にもパネルを企画し参加しているが、今後もこの学会の活動には積極的に参加してゆきたいと考えている。

今回の宗教・思想部会の共通テーマは「日本の諸宗教における癒しの戦略」(Healing Strategies in Japanese Religions）であったが、部会主催者（convener）アンナ・アンドレーバ（Anna Andreeva）教授が開会挨拶でも述べていたように、このテーマはかなりの反響を呼び、発表者を厳格に選抜した結果、13パネルに分かれて41の研究発表が行われた。この部会のプログラムは次のようなものであった。（以下パネルと発表者名のみを記し、個人発表の題目は省略する。またプログラム冊子には英文のパネル名しか掲載されていなかったため、筆者による和訳も加えておく。）

８月24日(水)
16：30
パネル　Early Shrine Cults: Celebrating Power or Averting Danger?（初期神社信仰―力の賛美か危険の回避か）*Mark TEEUWEN*, University of Oslo, *Bernhard SCHEID*, University of Vienna

８月25日(木)
９：00－10：30
パネル　Spiritual Healing in Japanese Pure Land Buddhism: Cures for Suffering in Genshin's and Shinran's Thought（日本浄土教における宗教的癒し―源信・親鸞の思想における苦の克服）*Robert F. RHODES, Michael CONWAY, INOUE Takami*, Otani University
11：00－12：30
パネル　The Embryological Discourse in Medieval Japan: A New Soteriology of the Human Body（中世日本における胎生学的言説―身体に関する新しい救済論）*ITŌ Satoshi*, Ibaraki University, *Lucia DOLCE*, SOAS, *YONEDA Mariko*, Kōbe gakuin daigaku, *ABE Yasurō*, Nagoya University
12：30－14：30
昼食
14：30－16：00
Individual Papers（個人発表パネル）
16：30－18：00
パネル　The Dead, the Living and the Gods as the Driving Forces of History(歴史を動かす力としての死者と生者と神々) *SATŌ Hiroo, SATŌ Sekiko, Vyacheslav ONYSCHENKO*, Tōhoku University

８月26日(金)
９：00－10：30
パネル　Healing Through the Six Realms: Transformative Rituals in Japanese Buddhism（六道の癒し―日本仏教における変革をもたらす儀礼）*Anna ANDREEVA*, University

of Heidelberg, *Benedetta LOMI*, SOAS, *OUCHI Fumi*, Miyagi Gakuin Daigaku, *Gaynor SEKIMORI*, SOAS
11：00－12：30
Individual Papers（個人発表パネル）
12：30－14：30
昼食
14：30－16：00
パネル　Tokugawa Medicine at the Crossroads（岐路に立つ徳川医学）*Peter KORNICKI*, Cambridge, *Angelika KOCH*, Cambridge, *Alessandro BIANCHI*, Cambridge, *Regina HÜBNER*, Cambridge, *Daniel TRAMBAIOLO*, Princeton University
パネル　Magic, Oracles and Tales of Love and Renunciation: A Reappraisal of the Priest Keisei and Kamakura Buddhism（愛と隠遁の託宣と物語―鎌倉仏教と僧侶慶政再考）*KAWASAKI Tsuyoshi*, Shujitsu Daigaku, *CHIKAMOTO Kensuke*, Tsukuba Daigaku, *Alari ALLIK*, Tallinn University
16：30－18：00
Individual Papers（個人発表パネル）
パネル　Transformation of Christianity in the 16th and 17th Centuries in Japan（16世紀と17世紀の日本におけるキリスト教の変革）*YOSHIDA Shin*, Heidelberg, *ORII Yoshimi*, Nihon University, *Sonia FAVI*, Ca'Foscari University, Venice, *TAKAYOSHI Kisaki*, Tokyo University

８月27日(土)
９：00－10：30
パネル　Aftermath: Religion in the Wake of the 1995 Aum Affair（1995年オウム真理教事件の余波の中で）*Ian READER*, Manchester, *Mark MULLINS*, Sophia University, *Benjamin DORMAN*, Nanzan University, *Erica BAFFELLI*, University of Otago
11：00－12：30
パネル　Psychotherapy from a Religious Perspective: Soul-healing Rituals in Japanese Religions（宗教の視点から精神分析を考える―日本宗教における霊的癒しの儀礼）*OKUNISHI Shunsuke*, Center for Japanese Language and Culture, Osaka University, *TONGU Masaru*, Nara University of Education, *Carmen SAPUNARU TAMAS*, Center for Japanese Language and Culture, Osaka University
12：30－14：30
昼食
14：30－17：00
EAJS General Meeting and Closing Ceremony　（総会・閉会式）

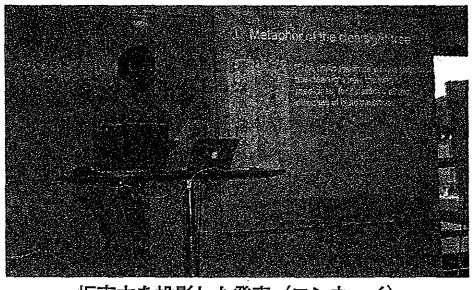
以上のように、この部会での発表は、時代的には古代から現在までに及び、また内容的には神道・仏教・キリスト教・修験道・民間信仰・新興宗教・徳川医学などを取り上げた、極めて幅広いものであった。パネルは時代順に設定されていたため、平安・鎌倉時代に関する私たちのパネルは、２日目の朝９時からの枠に設けられていた。しかし、この早い時間帯にも関わらず、20名近くの聴衆の前で発表することができた。このパネルの３名の発表題目を挙げると、次の通りである。

１）ロバートF. ローズ　Terminal Care Practice in Heian Pure Land Buddhism: the Case of the Nijūgo zammaie（平安時代のターミナルケア―二十五三昧会の場合）

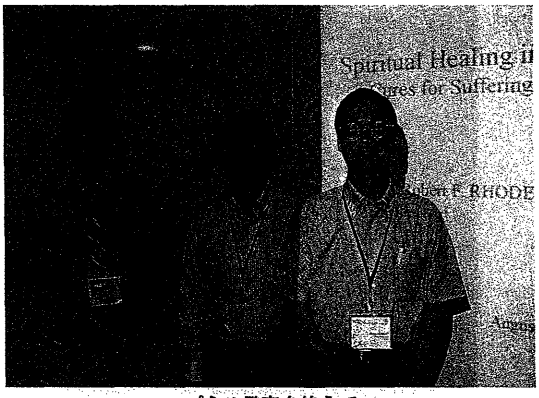
２）マイケル・コンウェイ　Medicinal Metaphors in a Soteriology of Transformation: Shinran's View of the Power of the *Nenbutsu*s（変容の救済論における医薬の喩え―念仏の力に関する親鸞の見解）

３）井上尚実　A True "Healing" in Amida's Compassionate Light: The Cure for Incurable Diseases in the *Nirvana Sutra* and the *Zenkoji Engi*（阿弥陀仏の慈悲の光による真の癒し―『涅槃経』と『善光寺縁起』における不治の病の治癒）

すでに述べたように、今回は「宗教と癒し」を共通テーマとしていたが、私たちのパネルでは日本の浄土教（特に真宗）では「癒し」をどう考えられているか、という点を、源信や親鸞の思想や実践を題材にして考察した。そのなかで、私たちが先ず注目した点は、浄土教では念仏が病気を治すために用いられてこなかった、ということであった。しかし、親鸞には「癒し」についての言説はまったくないのかといえば、そうではないことも忘れてはならないのである。親鸞は人間の実存的状況を「病」に喩え、念仏を通じてその「病」が癒され変革される（healing and transformation）という言説も存在するのである。発表の後には活発な質疑応答もあり、浄土教と癒しという重要なテーマを考えてゆくうえで、大きな刺激と示唆を受けた。



坂東本を投影した発表（コンウェイ）



パネル発表を終えて

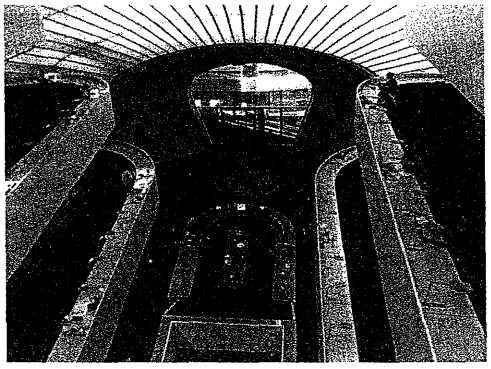
2．ライプツィヒ大学・ベルリン自由大学とコペンハーゲン訪問

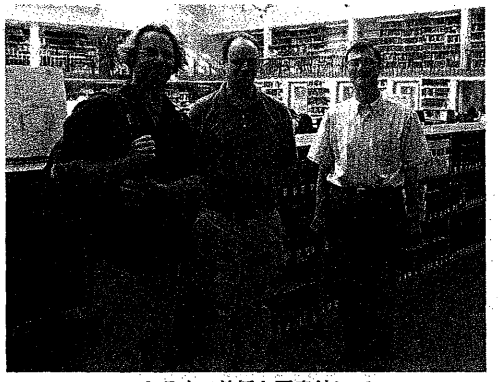
学会参加のためにタリンへ向かう前に、ドイツのライプツィヒ大学とベルリン自由大学を訪問し、各大学における仏教研究の状況を視察した。ライプツィヒ大学はドイツ最古の大学のひとつであり、文豪ゲーテや詩人のシラーが学んだことで名高いが、現在では、近代的な校舎を誇るモダンなキャンパスを持つ大学としても知られている。この大学はドイツにおける数少ない日本宗教研究のセンターとしても有名であり、近年、日本浄土教について造詣の深いクリストフ・クライネ（Christoph Kleine）教授が赴任してきたことにより、一層日本宗教の研究が盛んになっているようである。残念なことに、今回はクライネ教授に会うことはできなかったが、宗教学研究所（Religionswisssenschaftiches Institut）のウーゴ・デッシ（Ugo Dessi）講師と日本語学科のエリザベッタ・ポルク（Elisabetta Porcu）講師に会う機会に恵まれ、ドイツの日本宗教研究の現状についての貴重な情報を収集することができた。

ウーゴ、ポルク両先生は、マールブルグ大学でマイケル・パイ教授の指導のもと宗教学を学び、大谷大学で博士論文作成のための研究を行い、現代の真宗に関する優れた論文で博士号を取得された。現在ウーゴ博士は、任期制ではあるが、宗教学科の講師として活躍しており、またポルク博士もポスドクとして日本宗教の研究を続づけるかたわら教鞭も取り、教育と研究に没頭する日々を送っている。ライプツィヒ大学では、日本研究が盛んになりつつあり、特にクライネ教授が宗教研究所の所長に就任して以来、日本宗教の研究に関して力を入れるようになっているようで、今後の発展が期待される。

ライプツィヒでのミーティング

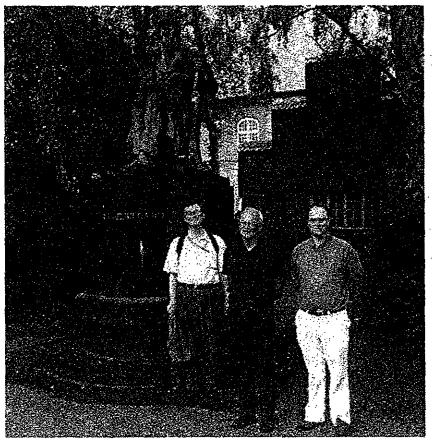
ライプツィヒ大学訪問後、ベルリン自由大学を訪れ、南アジア言語・文化研究所（The Institute for South-Asian Languages and Cultures）のインゴ・ストラウフ（Ingo Strauch）教授と意見交換を行う機械を得た。ベルリン自由大学はベルリン中心部から地下鉄で20分ほど離れた、閑静なダーレム地区に位置している。その歴史は比較的新しく、東西冷戦時代、西ベルリンにも大学を作りたいとの願いによって設立された。キャンパスの中心に立つノーマン・フォスター設計の校舎は、まるでSF映画に出てくるような超近代的な建物で、特にその一部をなす言語学図書室（Philological Library）は見るものを圧倒させる。ストラウフ教授の研究室も、この建物のなかにおかれていた。


ベルリン自由大学 言語学図書館



ストラウフ教授と図書館にて

ストラウフ教授は、ガンダーラ出土のカローシュティ文献の研究者として知られており、最近では*The Eastern Buddhist*の第41巻１号（2010年出版）に掲載された論文の中で、カローシュティ文字で書かれた阿閦仏信仰を主題とした経典の写本について詳しい報告をしている。その報告によると、この写本は字体などから紀元後１世紀後半から２世紀前半のものと推定され、最古の大乗経典のひとつである。ベルリン自由大学では、この経典を含むバジャール・コレクション（Bajaur Collection of Kharoṣṭhī Manuscripts）の整理と解読に取り組んできた。教授にはカローシュティ文献の研究の現状や将来的展望について、詳しく聞くことができた。しかし、残念なことにベルリン自由大学のインド学プログラムは廃止されることが決定されており、ストラウフ教授も今後の研究は、ミュンヘン大学のハルトマン（Jens-Uwe Hartmann）教授を中心にしたガンダーラ語文献の長期研究プロジェクトの中で行っていく予定であると聞き、大きなショックを受けた。ヨーロッパでは伝統的な古典研究が、予算カットのために徐々に縮小している。時代の流れかもしれないが、せっかく長い時間をかけて培ってきた学問の伝統が、いとも簡単に消え去ってゆくことは残念でならない。



王立図書館の庭のキェルケゴール像

タリン大学での学会発表が終わり日本へ帰る途中、隣国デンマークにエスベン・アンドレアセン氏を訪問することができた。アンドレアセン氏は、デンマークにおいてアジア・日本宗教研究を続けてきた研究者で、1997年にはハワイ大学出版から浄土真宗に関する英文の著書*Popular Buddhism in Japan: Shin Buddhist Religion & Culture*を出版している。その本のためのフィールドワーク以来、真宗大谷派・大谷大学と調査研究や著作について縁の深い研究者である。この５月にも来日して東日本大震災後の日本の宗教事情を調査されており、その折、今回のヨーロッパ出張の機会にコペンハーゲンを訪問して宗教施設・研究機関を視察してはどうかと招待を受けていた。予定した一日はあいにくの雨になってしまったが、キェルケゴールの旧跡を中心にコペンハーゲン市内の大学や教会、博物館を案内していただき、郊外のキェルケゴールのお墓にも参拝することができた。アンドレアセン氏は現在、日本宗教に関する４冊目の著書を執筆中であり、2013年の出版までに再度訪日がかなえば大谷大学を訪問して研究交流を深めたいと希望されていた。

キェルケゴールの墓

海外研究調査報告

フランス極東学院（École Française d'Extrême-Orient : EFEO）が所蔵するパーリ語写本の研究調査

西蔵文献研究　嘱託研究員　清水 洋平

大谷大学には、タイ王室から寄贈されたものを中心とする東南アジアのパーリ語貝葉写本（〈大谷貝葉〉と略称）が所蔵されている。その所蔵量は国内最大級であり、内外に誇る一大コレクションである。その中には、いまだ刊本になっていない稀覯写本が含まれている。そのため、南アジア・東南アジアに流布する仏典研究をおこなっている内外の研究者並びに研究機関から、大谷貝葉についての閲覧や複写などの問い合わせが度々ある。

大谷大学真宗総合研究所では、昨年度まで「指定研究：大谷大学DB研究」により、本年度からは「指定研究：西蔵文献研究」により、大谷貝葉の中で今までに稀覯文献と判明しているものを中心にデジタル画像データ化の作業を進めている。それと同時に、タイ国における現地調査も実施しながら、大谷貝葉における稀覯文献の抽出作業をおこなっている。

この稀覯文献の抽出作業の一環として、昨年、日本に滞在中であったパーリ語写本研究の第一人者であり、フランス極東学院名誉講師であるJacqueline Filliozat女史を大谷大学真宗総合研究所に招聘し、同作業に従事して頂いた（2010年８月30日から９月４日まで）。その結果、数ある稀覯文献の中でも、特に*Mahābuddhaguṇanvāta aṭṭhakathā*（請求記号番号：XXXIX-5, 6）という文献が、現時点では大谷貝葉以外には世界的にみても現存していない可能性が高いことを指摘された。その後、同文献について、J. Filliozat女史から、パリ所在のフランス極東学院が所蔵するパーリ語写本コレクションの中に関連する数点の写本が存在しており、大谷貝葉のものとの関連を調査すべきであるとの指摘を受けていた。

そのような状況のもと、この度、J. Filliozat女史から、フランス極東学院が所蔵する同文献の関連写本について、同学院での調査が許可されたとの知らせがあり、共同で研究調査を実施してもよいとの連絡を受けた。よって、2011年８月４日(木)～８月16日(火)（尚、大谷大学真宗総合研究所の業務終了後、続けて日本学術振興会科学研究費：研究活動スタート支援の業務（８月17日～８月26日）を実施）の日程で調査を実施した。

・８月４日(木)：午前、関西国際空港から出国し、現地時間17時05分、シャルル・ド・ゴール国際空港に到着。その後、宿泊先に移動。

・８月５日(金)：フランス極東学院を訪問。調査・写真撮影の事前準備、打ち合わせをおこなう。その後、写本文献にも造詣の深いインド学の専門家であるKamaleshvar Bhattacharya博士と意見交換。

・８月６日(土)：J. Filliozat女史の取り計らいで、フランス国立図書館（Bibliothèque nationale de France）を訪問し、同図書館が所蔵する、大谷貝葉の稀覯文献に関係のある写本文献についての閲覧及び調査をおこなう。（８月10日(水)にも同様の調査を実施。）

・８月８日(月)～８月16日(火)：フランス極東学院を訪問。J. Filliozat女史の全面的な協力のもと、共同研究調査並びに写真撮影作業を実施。フランス極東学院における調査文献名を以下に記す。

1. Buddhaguṇa（EFEO PALI 2）：一つ穴の短いタイプの貝葉写本であり、18phūk（束）で１套を構成している。内容は［Bhāṇavāra］、Buddhaguṇa、Buddhajayamaṅgalaṭṭhaka、不明、Aṭṭhāvīsatibuddhavaṇṇanā、［Dhammakāya］、不明、Akāravatāsutta、［Kammavācā］、［Vidhībindu］、Dasaparitta、Ādhārinaparitta、Mahāmeghaparitta、［Sutta］、Dvādasaparitta、Pāṭimokkhaの順に記されていた。Buddhaguṇaの記載箇所については、大谷貝葉のものと内容が異なる。
2. Mahābuddhaguṇa（EFEO PALI 40）：細身で長いタイプの絵付きSamut thai（折本紙）写本であり、内容はFace A—Mahābuddhaguṇa、Face B—［Vinayapiṭaka-Suttavibhaṅga-Pārājika］、［Suttantapiṭaka-Dīghanikāya-Brahmajālasutta］、［Abhidhammamātikā］、Sahassaneyya、Uṇhīsavijaya、［Paritta］の順で記されていた。Buddhaguṇaの記載箇所については、大谷貝葉のものと内容が異なる。
3. Mahābuddhaguṇavaṇṇanā（EFEO PALI 132）：細身で長いタイプのSamut thai写本であり、内容はFace A—Mahābuddhaguṇavaṇṇanā、Face B—［Vinayapiṭaka-Suttavibhaṅga-Pārājika］、［Suttantapiṭaka-Dīghanikāya-Brahmajālasutta］、

[Abhidhammamātikā]、[Sahassaneyya] の順で記されていた。Buddhaguṇaの記載箇所については、大谷貝葉のものと内容が異なる。

4. Mahābuddhaguṇa (EFEO PALI 133)：細身で長いタイプの絵付きSamut thai写本であり、内容はFace A— [Abhidhammamātikā]、Mahābuddhaguṇa、Mahābuddhaguṇa (前に記されているものとは異なるもの)、Face B— [Sahassaneyya]、[Vinayapiṭaka-Suttavibhaṅga-Pārājika] の順で記されていた。Buddhaguṇaの記載箇所については、大谷貝葉のものと内容が異なる。

＊Mahābuddhaguṇa (EFEO PALI 71)：Samut thai写本も所蔵されていることになっていたが、諸事情により調査がおこなえなかった。

その他、Rathasenajātaka (EFEO PALI 28)、Pācittakumārajātaka (EFEO PALI 31)、Candasenajātaka (EFEO PALI 32) ほか、多数の大谷貝葉中の稀覯文献と関係の深い写本文献についても調査をおこなった。

尚、8月15日(月)には、モン文字写本の専門家である国立東洋言語文化大学 (INALCO) のEmmanuel Guillon博士と意見交換をおこなった。

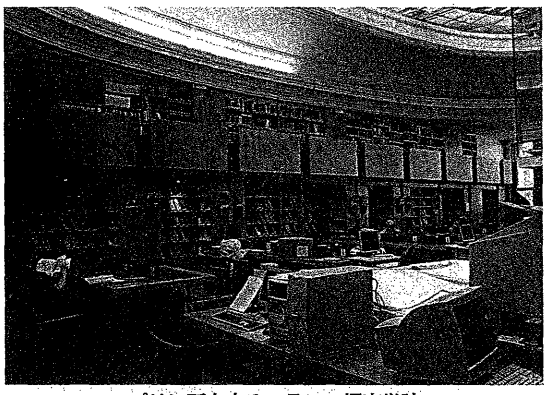
・8月17日(水)～8月24日(水)：日本学術振興会科学研究費：研究活動スタート支援の業務を実施。

・8月25日(木)：シャルル・ド・ゴール国際空港より出発。

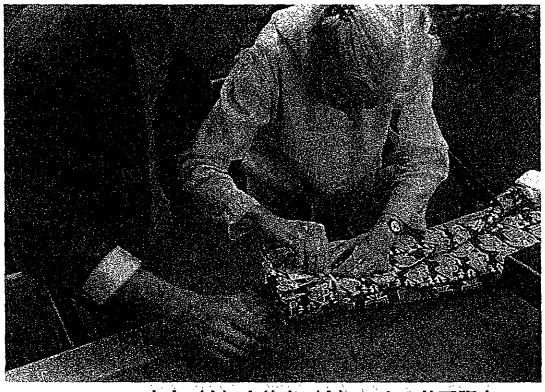
・8月26日(金)：日本時間8時25分、関西国際空港に到着。

今回の調査で、大谷貝葉に見られる*Mahābuddhaguṇanwāta aṭṭhakathā*については、パリのフランス極東学院が所蔵する写本文献の中には、同一のタイトルが記された文献は存在しないこと、タイトルは同一ではないが内容が一致するという文献（クメール文字写本ではタイトルの一部が省略される場合が時折見られる）も見あたらないことが確認された。よって、大谷大学が所蔵する同文献については、現時点では、他にその存在が確認されていないことから、貴重な写本文献資料であるといえる。また、大谷貝葉中の稀覯文献に関係のある同学院所蔵の写本文献資料についても、調査並びに写真撮影がおこなえ、デジタル画像として資料が入手できたことは大きな成果であった。

その他、今回、フランス国立図書館にも立ち寄り、僅かではあるが調査をおこなった。同図書館には、ほぼ完全に揃ったものとしては現在、同図書館と大谷大学などにしか所蔵されていない「北京版西蔵大蔵経」が蔵されている。同貴重資料について、両機関がそれぞれに欠損している部分の情報交換並びに将来の共同研究の可能性も考えられた。



パリに所在するフランス極東学院



J. Filliozat 女史（右）と筆者（左）による共同調査

国内学会参加報告①

言語活動重視の国語科教育における問題点と今後の展開

一般研究（髙山班）研究員・教授　望月 謙二

一　研究の目的

一般研究（髙山班）の研究題目は、「小学校の教育実践にみられる子どもの変容の分析と考察」であり目的を、

新学習指導要領の下で、子どもたちに「生きる力」が育成されているかどうかを検証するために、①「基礎・基本的な知識・技能」（＝基礎学力）、②「思考力・判断力・表現力」（＝応用的学力）、③「言語活動」を軸として、教育実践を調査・分析することを目的とする。特に、「言語活動」の土台が形成される小学校段階に対象をしぼり、子どもの変容過程・学力形成に注目し、基礎学力がどのようにして「生きる力」に結びつくのか、基礎学力を保障しながらどのようにして個性を伸ばすことが可能であるのかを考察する。

としている。今回は二つの学会に参加して、言語活動重視の国語科教育にはどのような問題点があり、今後どのように展開していくべきなのかを考察した。

二　日本文学協会国語教育部会第63回夏期集会

８月６日・７日に二松学舎大学で実施された上記集会に参加した。６日は田中実（都留文科大学教授）の基調講演「文学教育研究の伝統と再建―第三項理論」の後、講座としての分科会が行われ、中学校分科会に参加した。「復活教材『トロッコ』を読み直す」（大谷中・高等学校教諭　角谷有一）・「教材『少年の日の思い出』の読み」（愛知教育大学教授　丹藤博文）の発表があった。７日の午前中は実践報告の分科会があり、小学校分科会に参加した。「二年生と『きつねのおきゃくさま』を読む～人物の関係から自分を発見する授業～」（八千代市立大和田西小学校教諭　田邉義行）・「大造じいさんとガン」（松阪市立小野小学校教諭　草分京子）の報告を聞いた。午後はシンポジウム「〈文脈〉を掘り起こす」に参加した。提案題目（シンポジスト名）は「『小説』論の射程―『ごんぎつね』（新見南吉）と『神様』（川上弘美）」（東京都立産業技術高等専門学校教授　高野光男）・「子どもの文脈を読む　子どもの文脈から読む」（前三重大学教授　藤原和好）・「まだまだカブはぬけません―〈文脈〉を掘り起こす―」（横浜国立大学教授　府川源一郎）であった。日本文学協会国語教育部会においては、「第三項理論」という新しい読みの方法論を確立し国語科教育に活かしていこうとしているが、言語活動にまで結びつく実践は少ないように思えた。しかしながら、

①「基礎・基本的な知識・技能」（＝基礎学力）

②「思考力・判断力・表現力」（＝応用的学力）

と「第三項理論」との関係を明確にすることで、言語活動につなげることができるのではと考えられる。

三　日本国語教育学会第74回国語教育全国大会

８月８日・９日に日比谷公会堂・品川区立小中一貫校日野学園で実施された上記大会に参加した。８日の午前中にはシンポジウムⅠ「『言語活動の充実』と国語単元学習」が実施された。田近洵一（東京学芸大学名誉教授）・浜本純逸（神戸大学名誉教授）・桑原隆（早稲田大学教授）の三氏により、単元学習をより発展した形で取り入れていくことで言語活動の充実をはかることが可能かどうかが論議された。特に田近の「国語教育革新の道　単元学習の可能性と今後の課題」と桑原の「言語活動の充実への視点」という論題に、単元学習と言語活動の関係が明確に示されていた。午後には西田拓郎（大垣市立西中学校教諭）の公開授業（生徒　筑波大学附属中学校１年生）に続いてシンポジウムⅡ「生涯にわたって身につけたい語彙力」が行われた。西田の公開授業は「単元名　『季語』と出会う」全３時間の内の２時間目にあたるものであった。具体的には、

１時間目　『はいくえっせい』を楽しく読み味わう。

２時間目　「季語」が表す様子や心情をさぐる。（本時）

３時間目　歳時記にある「季語」を題にした『はいくえっせい』を書く。

となっていた。教師による講義形式の授業ではなく、単元学習の中で言語活動を仕組む取り組みであった。公開授業を受けた形でのシンポジウムⅡでは、「生涯にわたって身につけたい語彙力」（実践女子大学教授　生野金三）・「『言葉の力』を『生きる力』にするために」（さいたま市立本太小学校教諭　米玉利優子）・「『はいくえっせい』で「季語」と出会う」（西田拓郎）・「語彙の拡充は知識量や実用性を越えて」（東京学芸大学附属高等学校教諭　浅田孝紀）といった提案がなされた。単元学習の中で言語活動を重視するあまり、ともすれば語彙力といった基礎・基本が疎かになる。そうならないよう

に実践を積み重ねるべきであるといった発言が多かった。

公開授業の様子（授業者提供）

９日の午前中は校種別分科会が行われ、小学校分科会に参加した。具体的には鳥谷幸代（秋田大学附属小学校教諭）・清野真美子（山形大学附属小学校教諭）の実践報告である。共に、単元学習の中で言語活動を重視した実践であった。午後はワークショップ型分科会が行われ、「言語活動を支える論理的思考力・表現力育成のための授業づくり（小・中学校）」（担当　熊本大学教授　河野順子）に参加した。

四　まとめ

言語活動重視の国語科教育においては、活動を重視するあまりに児童にとっての学びの内実が明確になっていないとの危惧が指摘されやすい。日本文学協会国語教育部会の重視する「第三項理論」を読みにおける基礎・基本として提起するという方法論も可能であろう。日本国語教育学会における単元学習の優れた取り組みに着目することも考えられる。二つの学会に参加したことにより、有意義な意見交換や資料収集が行えた。今後の研究に活かしていきたい。

国内学会参加報告②

日本動物心理学会第71回大会（Animal 2011）に参加して

一般研究（高橋班）研究代表者・任期制講師　高橋　真

日本動物心理学会は、1933年より活動を始めた、動物の心と行動に関する学問を研究する研究者が集う学会である。学会の活動としては、年２回の学術雑誌「動物心理学研究」の発行と、年１回の学術大会を行っている。

日本動物心理学会の学術大会は本年度で71回目を迎えた。本年度の大会は、日本動物心理学会、日本動物行動学会、応用動物行動学会、日本家畜管理学会の４学会共催の学術大会、Animal 2011として慶應義塾大学三田キャンパスで開催された。日本動物心理学会の学術大会は、日本基礎心理学会の学術大会と合同で共催はあったが、上記の４つの大会の合同は初めての試みであり、様々な分野の動物行動の研究者が集う学術大会であった。

Animal 2011は、2011年９月８日から９月11日の４日間開催された。口頭による研究発表、ポスターによる研究発表に加え、様々な講演、シンポジウム、ワークショップが開催された。

大会初日の９月８日の午前中には４つのワークショップが開催された。午後からは一般の口頭発表、ポスター発表が開催された。さらに、夕方から日本動物行動学会企画シンポジウムとして、「せがむ子供と渋る親：Begging 再考」が開催された。

大会２日目は口頭発表、ポスター発表に加え、午後から、応用動物行動学会・日本家畜管理学会企画シンポジウムとして「彼を知り己を知れば―動物の行動特性を生かした害獣・害鳥・害虫対策―」が開催された。

夕方からは、基調講演として、ヨウムの言語獲得研究で世界的に著名なIrene M. Pepperberg博士による講演「Numerical competence in Grey Parrots: Similarities to, and difference from, that of young children」が行われた。基調講演では、これまでのヨウムの言語獲得研究の流れから、現在の最新の研究動向まで、非常に多彩な講演であった。

基調講演の後、東京プリンスホテルで懇親会が行われた。この懇親会には多数の参加者が出席し、交流を深めるとともに、それぞれの研究に関する議論が活発に行わ

れた。

大会3日目は、通常の口頭・ポスター発表に加え、日本動物心理学会企画シンポジウムとして「動物研究最前線：擬人主義とどうつきあうか」が開催された。さらに、夕方からは5件のワークショップが開催された。

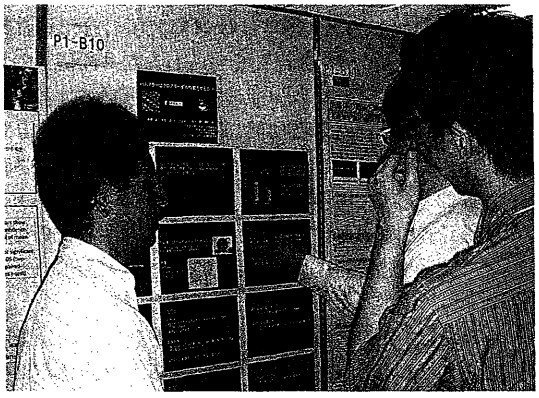
大会4日目は、通常の口頭・ポスター発表に加え、日本動物看護学会講演会「イヌを用いた実験の洗練度向上のための動物看護技術の紹介」、4学会合同公開シンポジウム「イヌを学ぶ、イヌに学ぶ」が開催された。

筆者はAnimal 2011において、ポスター発表を行った。筆者の発表は、大会初日午後から2日目の午前に掲示された。発表に対する責任在席時間は大会2日目の午前中であった。

筆者の発表の概要は、以下のとおりである。筆者は、金沢大学の谷内通准教授、京都大学の藤田和夫教授との共同研究において、ラットがヒトと同様の知覚基盤を持っているかどうかを調べた。その結果、ラットは音声ノイズと視覚的ノイズに対して一致性を知覚している可能性を示した。しかし、直線運動と純音に関してはヒトと同様の共通性を知覚していない可能性を示した。同じ手法を用いて、ラットの近縁種であるハムスターが、同様の知覚をしているかどうかを、上記の2氏、および、京都大学の別役透氏、玉井智之氏との共同研究で調べた。その結果、ハムスターがラットと同様に音声ノイズと視覚的ノイズに対して一致性を知覚していると考えられる結果が得られた。

ヒト以外の動物のクロスモーダル知覚は、霊長類の一部でのみ示されており、ラットやハムスターでの報告は極めてわずかである。さらに、筆者の用いた滞在時間指標とした検討は、ラットやハムスターといった動物の知覚研究では用いられていない手法である。こうした新たな知見を含んでいたこともあり、何人かの研究者がポスターの発表を見に来ており、詳細な議論をすることができた。さらに、チンパンジーの共感覚の研究を行っている京都大学霊長類研究所の足立幾磨博士から、最新の研究の知見、および、今後の研究の方向性を示唆して頂いた。

Animal 2011では、ヒトやチンパンジーといった高等霊長類から、昆虫など、これまでの動物心理学会では少なかった種の研究も発表されていた。こうした試みは、様々な視点から意見交流を可能としたため、動物行動の研究にとっては極めて貴重な学会であった。



筆者（左）と京都大学文学研究科大瀧翔氏・別役透氏とのディスカッション

公開講演会報告

コーシャ・ガボル准教授（エトウェシ・ロラーンド大学）とマイカ・アワーバック准教授（ミシガン大学）による最新の研究

国際仏教研究 研究員・准教授　井上 尚実

(1)最新のマニ教学における仏教との比較研究

６月２日㈭、ハンガリーのエトウェシ・ロラーンド大学（本学の学術提携校）からコーシャ・ガボル准教授をお迎えして「近年日本で確認されたマニ教絵画にみられる仏教図像学的特徴について」と題する本年度第１回公開講演会が開催された。コーシャ准教授は中国宗教史の専門家で、近年は中国におけるマニ教と仏教の関係について研究されている。2009年には京都大学の吉田豊教授（文献言語学、イラン諸語）を中心とした共同研究のため一年間京都に滞在され、その折にも中国語のマニ教聖典にみられる浄土教語彙に関して本学で公開講演をしていただいている。今回は、奈良の大和文華館で開催された「信仰と絵画」国際シンポジウム：「日本に現存するマニ教絵画の諸問題」に参加するため来日されたのを機会に、本学でも関連した公開講演をしていただくこととなった。

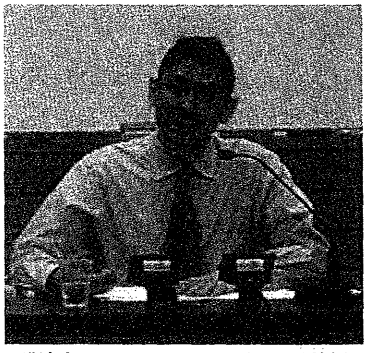
マニ教は、ササン朝（226－651）のイランでマニ（216-ca.277）によって創唱され、その善悪二元論を基本とする教えを伝道するために、西方ではキリスト教、イランではゾロアスター教、東方では仏教の語彙や概念を巧みに利用して世界宗教となった。中国には唐代の694年、北部に伝来して「摩尼教」として広まり、元の時代には「明教」の名で江南の福建や浙江地方に多くの信者を集めた。中国におけるマニ教は、中期ペルシア語・パルティア（安息）語で書かれていたマニ教聖典を翻訳するために、基本的には仏教語彙を用いており、その図像的表現にも仏教の影響が色濃く認められるという。今回、大和文華館の「信仰と絵画」特別展で公開されたマニ教絵画は、中国から日本に伝来して現存するもので、京都大学の吉田豊教授らによってマニ教絵画であることが確認され、昨年９月の発表以来「画期的な発見」として世界のマニ教研究者の注目を集めている。

コーシャ准教授の講演は、この分野における最新の研究成果を詳細に伝えるもので、文献学的考証に裏付けられた図像学の水準の高さを示していた。特に、パワーポイントを使って細部まで分析された「マニ教『宇宙図』」は、仏教的宇宙図と対比されてとても興味深く、講演後の質疑応答においても活発な議論が交わされた。

講演会後コーシャ先生（前列右から三人目）を囲んで記念撮影

(2)新たなアプローチによる近代日本仏教研究

７月８日㈮に、ミシガン大学のマイカ・アワーバック准教授をお迎えして「護法論としての仏教史：明治時代における釈迦牟尼仏の語り直し」と題する公開講演会が開催された。アワーバック准教授はプリンストン大学で近代仏教を専攻され、「帝国主義時代の日本仏教：1877－1931年の朝鮮半島植民地における布教活動」に関する研究で2007年に博士の学位を取得された。現在はミシガン大学のアジア言語・文化学部で教鞭をとられている。昨年夏から１年間、日本学術振興会研究員として京都の国際日本文化研究センターで研究されていたが、７月の帰国直前に公開講演をお願いすることができた。博士論文執筆のため日本に留学されたとき、本学の木場明志教授に指導を受けていらっしゃったので、今回の講演は久しぶりの大谷大学訪問・研究交流の機会となった。



講演中のマイカ・アワーバック准教授

講演のテーマは、アワーバック准教授が現在取り組まれている研究に関するもので、幕末から明治の日本において歴史的仏陀・釈尊に関する関心が高まり、仏伝の語り直しが行われるようになったことについて、思想史的背景をふまえてお話された。多くの学僧や知識人によって仏伝の語り直しが行われた背景には、まず伝統的な仏教経典に対する富永仲基（1715－1746）の批判的な研究と、それを受けた幕末の廃仏思想の普及があった。明治初年の「廃仏毀釈」から仏教が復興する中で、西洋近代の仏教学・仏教史学の方法が導入され、井上円了・村上専精・姉崎正治・境野黄洋などの学者によって、釈迦牟尼仏とその教えの「語り直し」が進んだ。彼らの新しい仏伝・仏教解釈には、「客観的合理性」や「歴史性」の枠にとどまらない護法的な性格が見いだされるということに注目して論じられた。近代仏教研究の新たなアプローチとして、今後の進展が期待される発表であった。

真宗総合研究所彙報　2011. 5. 1～2011. 9. 30

■研究所関係

◎真宗総合研究所委員会

◇6月1日(水)　16時20分～（博綜館5階第4会議室）

1．2010（平成22）年度「決算」について
2．2011（平成23）年度「予算」について
3．2011（平成23）年度「特定・一般研究」の研究組織（追加）について
4．その他

◇9月7日(水)13時～（博綜館5階第4会議室）

1．TLKの著作権について
2．その他

○研究補助員雇用契約事務説明会

◇5月10日(火)　12時20分～（真宗総合研究所ミーティングルーム）

1．研究補助員辞令交付
2．研究補助員雇用契約の締結について
3．研究補助業務に関する事務説明
4．その他

「建学の精神」教育推進研究

【研究会】

第1回研究会

◇2011年5月10日(火)　16：30～17：50

場所：博綜館3階　303教室
議題：①建学の精神の具現化について―今後の活動内容の確認―
②研究員・補助員の顔合わせ
③2011年度前期、全体会議の日程調整

第2回研究会

◇2011年6月9日(木)　16：20～17：50

場所：博綜館5階　第5会議室
議題：清沢満之・佐々木月樵両先生の訓辞について
形式：公開研究会
講師：一楽真氏（大谷大学教授）

第3回研究会

◇2011年7月7日(木)　16：20～17：50

場所：響流館4階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
議題：今後の研究方針について

第4回研究会

◇2011年7月28日(木)　16：20～17：50

場所：響流館4階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
議題：今後の研究方針について

【その他】

第1回 事務連絡会議

◇2011年4月7日(木)　16：00～16：30

出席：木越康・箕浦暁雄・西本祐攝・拝原祥子
場所：聞思館1階19号室（木越康個人研究室）
議題：①事務・顔合わせ
②研究内容の確認
③会議・研究会の予定調整―第1回全体会議について―

第2回 事務連絡会議

◇2011年5月10日(火)　17：50～18：10

出席：木越康・箕浦暁雄・拝原祥子
場所：聞思館1階19号室（木越康個人研究室）
議題：第1回全体会議での課題確認
①大学史編纂の関係者（現大学資料室）への確認
・歴代学長等による「建学の精神」に関する訓辞資料の収集について
・『大谷大学百年史』「建学の精神」に関する記事の編纂方針について
②学生手帳掲載「建学の精神」についての確認作業

第3回 研究会準備会

◇2011年5月25日(水)　18：00～19：20

出席：木越康・箕浦暁雄・西本祐攝・拝原祥子
場所：響流館4階　真宗総合研究所内　ミーティングルーム
議題：次回研究会の準備

国際仏教研究

〈英米班〉

《国際学会参加》

○第15回国際真宗学会学術大会　（於 大谷大学）

学会開催期間：2011年8月4日(木)～8月6日(土)
参加者：ロバート・F・ローズ、井上尚実、マイケル・コンウェイ、マイケル・パイ、マーク・ブラム、ジェームズ・ドビンズ

○第13回ヨーロッパ日本研究協会国際会議（於エストニア、タリン大学）

学会開催期間：2011年8月24日(水)～8月27日(土)
参加者：ロバート・F・ローズ、井上尚実、マイケル・

コンウェイ

《会議・研究会》
◇佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」翻訳研究
第11回研究会　2011年7月28日(木)　18:00～19:30
(於：真宗総合研究所内ミーティングルーム)
◇ヨーロッパ日本研究協会国際会議パネル発表のための研究会
第1回研究会　2011年6月17日(金)　18：00～19：30
第2回研究会　2011年7月5日(火)　18：00～19：30
第3回研究会　2011年8月9日(火)　13：00～14：30

《公開講演会》
①2011年6月2日(木)　16：20～18：00
於：マルチメディア演習室（響流館3F）
講師：コーシャ・ガボル氏
(ハンガリー、エトウェシ・ロラーンド大学准教授)
題目：近年日本で確認されたマニ教絵画にみられる仏教図像学的特徴について

②2011年7月8日(金)　16：20～17：50
於：マルチメディア演習室（響流館3F）
講師：マイカ・アワーバック氏
(アメリカ、ミシガン大学大学准教授)
題目：護法論としての仏教史：明治時代における釈迦牟尼仏の語り直し

〈ドイツ・フランス班〉
◇2010年5月5－6日に開催されたシンポジウム"National Identities and Religion: A French-Japanese Comparative Approach"（於 フランス国立高等研究院）にて行われた口頭発表（発表者：ロバート・F・ローズ、井上尚実、村山保史、飯田剛史、藤枝真、番場寛）を、各発表者が論文化する作業を行っている。国立高等研究院のフィリップ・ポルティエ教授の協力を頂き、フランスにて公刊する予定である。

西蔵文献研究
《研究打ち合わせ》
◇5月25日(水)　16時20分～17時50分（真宗総合研究所ミーティングルーム）
議　題：研究業務の進捗状況の確認

◇6月29日(水)　16時20分～17時50分（響流館4階会議室）
議　題：研究業務の進捗状況の確認

◇7月27日(水)　16時20分～17時50分（真宗総合研究所ミーティングルーム）
議　題：研究業務の進捗状況と夏休み中の活動の確認

《出張》
◇2011年8月4日(木)～8月26日(金)
＊但し、西蔵文献研究の業務は、8月16日(火)まで。終了後、続けて日本学術振興会科学研究費：研究活動スタート支援の業務を8月26日まで行なう。
出張者：清水洋平（嘱託研究員）
出張先：フランス共和国・パリ
目　的：フランス極東学院（École Française d'Extrême-Orient）所蔵のパーリ語写本に関わる共同研究並びに打ち合わせ会議・調査。

真宗同朋会運動研究
《事務連絡および定期研究会》
◇2011年度：毎週月曜日　13：00～16：10（3・4限）
研究会、調査のテープ起こしとその成文化、そして、内容の位置づけを行うため、読み合わせを実施している。

《公開研究会について》
現在、本研究成果の出版に向けて、過去に行った公開研究会のテープ起こしを行い、講演いただいた先生方と校正を行っている。

《聞き書き調査の実施》
聞き書き調査の実施は、本研究の中心課題であり、主に門信徒の方々に行っている。
本年度は現在までに、北海道、富山県、石川県、岐阜県、大分県において計6回の聞き書き調査を行っている。詳細な調査内容に関しては個人情報に関わるので本彙報では省略させていただく。

《出版作業》
現在、本研究成果を出版する計画を進めている。構成の検討や目次案、そして各原稿の校正作業を進めている。

大谷大学史資料室
2011年5月24日
全国大学史資料協議会西日本部会2011年度西日本部会総会・第一回研究会

会　場：武庫川女子大学中央キャンパス
参加者：稲葉維摩（研究補助員）・大畑博嗣（アルバイト）

2011年６月７日～７月12日
大学史資料室が保管する資料の展示
会　場：図書館一階展示スペース
展示内容と目的：明治期から現在までの履修要項などを展示した。過去の学生達はどのような授業を受けていたのかを比較することによって、現在の学生が大学の歴史に触れる機会を作ることを目的とした。

親鸞関係文献目録資料室

○2011年９月20日㈫　13：00～15：00（真宗総合研究所フリースペースデスク）
資料室会議
・活動方針の確認
・収集データの点検

研　究　所　報　第 59 号

2011年10月１日　発行
編集発行　大谷大学真宗総合研究所
〒603-8143　京都市北区小山上総町
Tel. 075-411-8498　Fax. 075-411-8435

©2011 Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute